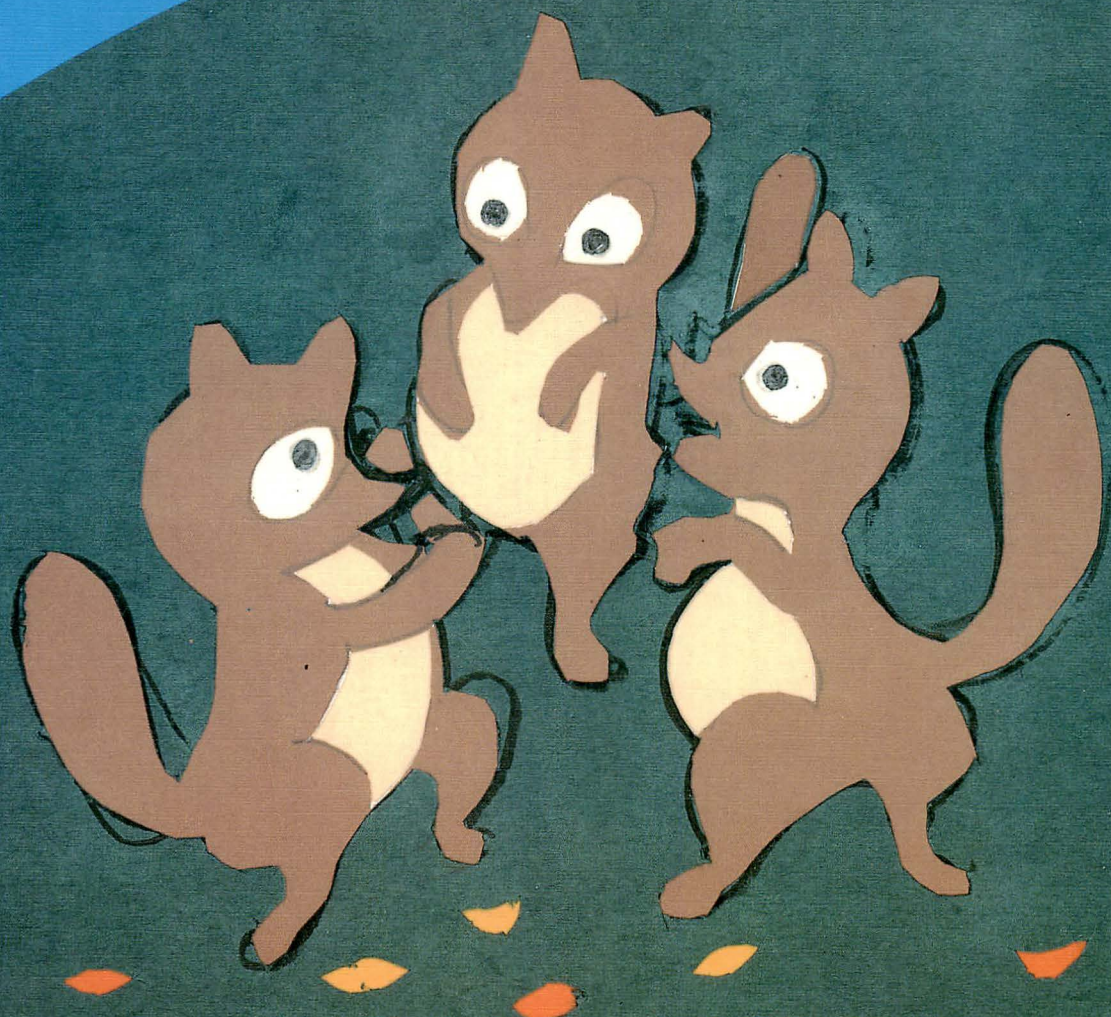


ふる里の記録

民話・伝説篇



川内町老人クラブ連合会編

ふる里の記録

民謡・伝説篇

川内町老人クラブ連合会

「ふる里の記録」の発刊を祝して



わがふる里「川内町」の北部地区から古代人の石包丁、石鏃などが発見され、またこの地方の豪族の前方後円墳もあることから、相当以前から拓けていたものと推定されます。中世伊予の名族、河野氏の治下であり、宿場町となり往来の要路として栄え、幾多の変遷を経て今日のめざましい技術革新によって経済成長を遂げた。私達の生活様式も大きく変わり、祖先からの有形無形の財産伝統文化や古くから語り継がれた物語りも忘れられてきている今日、川内町の発展の陰にはこれら先人の知恵物語りがあったことを偲び、ふる里への認識を深め古いものの中に新しいものを探ね繁栄への誓いを新たにします。

川内町老人クラブの皆様が、クラブ活動の一環として、古老から語り継いだふる里の歴史や伝統を後世に伝えることは誠に意義深く、ふる里づくり運動の推進になるものと確信する次第であります。

「ふる里の記録」を発刊するにあたり編集委員会各位をはじめ、ご指導とご協力をいただいた方々に深甚の謝意を捧げ発刊のお喜びのことばといたします。

昭和六十一年十一月

川内町社会福祉協議会会長 藤井 正

はじめに



川内町老人クラブ連合会では、「ふる里の記録」第三集として、「川内のむかし話」を編集発行することになりました。

これは老人クラブ活動の一環として、ふる里に埋もれている民話伝説を収録し、二十一世紀を生き抜いていく若者に語り伝え、文化の香り高いふる里づくりを願って編集したものです。

私達の遠い祖先は、霊峰石鎚の連山を朝に夕べに眺め、夜明けを告げる鶏声で深い眠りからさめ、瀬戸の海に夕日が沈み、夕餉の煙がたなびくふる里に古寺の梵鐘が響くころ、鍬の手を休め感謝と幸わせを願う人々の生活が繰り広げられました。

そこには自然と暖かい人々の心と心の通い合う素朴な暮らしがあり。その中に歴史と伝統のあるよきふる里が築かれてまいりました。

しかし、時代は移り変わり激動の今日の社会では、ややもすると人間の心がすさみ、ふる里の幻想の世界を探る機会さえ、見失なわれているように思えてなりません。

こんな時、幼き日に父母の背で聞いたおとぎ話や、古老を訪ねて聞きとった話を冊子にまとめ、これを若者に伝えさらにこれが子孫へ受継がれることは、私たち老人の深く願うところであります。

この「民話、伝説編」を編集するにあたっては、川老連「昔話を集める会」のみなさんが資料収集に東奔西走し、これを編集委員各位が分担執筆したもので、多くの方々の大きな支えにより完成されたものであります。みなさまのお力添えに対し心から厚くお礼申し上げます。

さらに発刊にあたりましては町当局をはじめ関係各位のご指導とご援助に深謝いたしますと共に、ふる里のま
すますの繁栄を祈念する次第です。

昭和六十一年十一月

川内町老人クラブ連合会長 高須賀 忠五郎

目次

滑川

平和に殉じた今井四郎兼久	1
平和の神霊若宮神社	3
柏大明神	4
十夜守物語	5
海上物語	6
風穴と産屋ヶ谷	6
鼓ヶ嶽	7
イボとりのお塚さん	7
大道寺八伽羅之介屋敷跡	8
八重姫様の墓	8
塩嶽	9
お帳塚さん	10
倒れなかった松の木	10
相名の峠物語	11
がまん強かった綱右衛門	11
節分に豆をまかない渡部家	12

餅を搗かなくなった家の話

牛鬼の墓

神木のたたり

盗人滝の話

福見観音さんの御利益

九騎鉦山

土谷

継母の涙

土谷 怪異物語

夜な夜な女が添い寝していた話

長渕の怪

貝坂の無縁墓地

本谷の白山権現

土谷物語

お頭中島七兵衛翁

重五郎さんの桜

コドの峠東側のお地藏さん

ハメガシラの古戦場

22

21

21

20

20

20

19

18

17

16

16

15

15

14

13

土谷三島神社縁起	22	法術の効く法印さん	35
土谷熊野神社縁起	23	かさもり	36
土谷霊異記	24	伊予の善根酒屋	37
東 谷		乃木將軍と黒尾上等兵	38
お小左衛門さん	25	松 瀬 川	
永野の一字一石供養塔	27	和尚と狸	39
龍翁山、観音寺	29	添谷の生い立ち	40
成谷川の由来	30	権田、弓矢の強弓物語	41
餓鬼が森	31	慈限様と金蔵院	42
伸び上がり狸	31	墓が成る由来	44
狸に化かされた人	32	大崩壊物語	45
御定神さん	32	名医橋本祐元先生を偲ぶ	47
正 夢	33	お菊、秀光の悲恋物語	49
官山の大蛇	33	西 谷	
河之内の八軒家	34	法界門橋の地蔵の由来	51
兄 弟 洩	34	お塚田のはなし	52
姫藪塚の由来	34	井内中野組の昔話	54
金毘羅さんの方便	35	小手ヶ滝城周辺の地名	55

盆念仏の行事	55
善城寺にまつわる話	55
久尾の乳地藏さん	56
北 方	
齊藤別当実盛の碑	57
自性庵と淡島大明神	59
久万山騒動奇談	60
おさん狸	62
枕がえしの石	63
南 方	
曲里の金毘羅権現と霊石	64
堂の元の由来	66
米研狸の正体	68
三本松のお染狸	70
塩ヶ森の大蛇	71
のびやがり狸	72
川 上 町	
名越座の素人大芝居	74

滑川

平和に殉じた

今井四郎兼久

「驕る平家は久しからず」平氏が文治元年、屋島の壇の浦に敗れて今年（昭和六十年）で丁度八百年になる。この話はこゝから始まる。

旭将軍（木曾義仲）を支えた中原一族の今井家に、兄弟四人がいたが、長兄兼光と次兄兼平は粟津ガ原の戦いで主人と共に散華した。

末弟の四郎兼久は故あってか、源氏の大将義経の配下に加わり、平氏追討のため海路から阿波国小松島に上陸し、平氏の予想とは逆に屋島の裏側から攻めた。それで平氏は、くもの子を散らしたように、本隊は海路を壇の浦へ、逃げ遅れた一部は山道つたいに阿波の国祖谷山に、あるいは伊予国保井野に逃避した。

追手の四郎兼久は、五百余騎の軍勢を率いて明河の「お成り」部落まで追撃して来た。

もともと四郎兼久は平和を理想とし、情け深い武人であって、今や袋の鼠状態に追いつめたこの平家軍を、殲滅することは容易だが、そうすると本人はもちろん残った妻子に類が及ぶことを深くあわれみ、できることならば戦わずして帰順させる方法はないものかとその時期を待っていた。

それとは知らず死にも狂いの平氏軍は、明河海上にある「鼓ガ嶽」に衛所を設け、嶽の頂上に密生した松の大木を利用して矢来を作り、弓軍を配備し源氏の



道路からみた鼓ガ嶽

來襲に構えていた。

兼久軍はこれに気付かず、無駄な抵抗を止めるよう説得に出かけた。ところが不意に嶽の上から弓軍の一斉射撃を受け、数名の死傷者が出た。敵は大将兼久を狙っていたので、兼久は矢を左肩に受け落馬した。

その頃、この部落に五、六軒の里人が住みつき、原始的な生活をしていたが、その中に家号を「古屋」と呼ぶ家があった。兼久は其処へ担ぎ込まれて手当を受けた。

古屋は老人夫婦と「おとめ」という娘の三人暮らしだった。おとめは気立ての優しい、美しい娘であった。娘はまごころを尽くして介抱し、兼久もまたその厚意に感謝した。やがて日増しに快方に向かい、程なく近くにある「塩滝」まで二人揃って散歩ができるようになった。

兼久はこの塩滝が、わが故郷奥州塩竈神社に似ているところから「塩竈奥の院」と名付けたと伝えられて、今もその名が残っている。

しかし、惜しいかな、その年の初秋、さしもの平家

一門も長門壇の浦で、全滅との報に接し、兼久は敵ながら無残、この世の地獄と哀れに思い落胆し、遂に愛するおとめに抱かれ、戦争否定を叫びながら息を引き取った。その精神は乱世の時代に稀にみる平和愛好者だったと言えよう。

亡骸は海上部落の一番高い見晴らしのよい処に葬られ、屋敷には小さな祠を設け「若宮神社」と呼び現在に至る。

おとめは兼久との間に女兒をもうけ、父の名を取って「おかね」と命名した。長じて兼久の家来である大道寺家より養子を迎え、古屋の家督を継ぎ子孫は今日に及んでいる。

今も九騎、伊野曾部落は平家の子孫、海上は源氏の流れが多いと言われている。しかし、今は昔の恩讐を越えた平和で静かな山里である。

大正の初め頃、海上の鼓ガ滝に鎮座する新田神社付近から鎧、兜、刀剣類の埋蔵品が発掘されたと聞くがその後の行方は分からない、惜しみても余りがある。

平和の神靈若宮神社

明治六年、政府は国民皆兵、富国強兵を目指して、徴兵令を布告した。男子二十歳になると、全員徴兵検査を受けさせ、合格した者は入隊させ軍事教育をほどこした。最初は三か年の實役だった。

満期除隊後といえども、一旦緩急（まんいちさし）せまった状態）あれば、赤紙（召集令状）一枚で応召し、戦場へ赴かねばならなかった。

この軍国主義は日本国中に漲り、軍人になることを無上の名誉とし、家の誇りとした。

そうした世相とは裏腹に、内密に徴兵の忌避（いやがって避けること）を願う人もあったことも否めない。働き盛りの若者が三か年も、軍隊に奉公することは、一家に取って大きな打撃であったであろうし、また中には、人間として自由、平等を願う軍隊のような強制訓練に耐えられない人もいた。



平和の若宮さん

若宮神社の神靈は、その由緒から平和を愛し、戦争否定の守護神と崇められ信仰されていた。そこで誰言うともなく、徴兵のがれの悲痛な願いは、噂となり、呪文のように口から口へと広がった。当時徴兵検査に合格していても人員の都合で「くじのがれ」の制度があつて入隊を免除されるので、せめてこの『くじ』にあやかりたいと祈念する家族もいた。

この社は、その筋の弾圧を受けたという噂はな

かったが、世を憚りながらご利益に預かりたいと、密かに参拝する人は後を絶たなかったようだ。

国道十一号線、落出から滑川の谷を十キロ、悪路を徒歩で海上部落まで行く。こゝから更に道は狭く坂道になっていて、その両側に紅白の幟が立ちならび、荷馬も通りにくい状態だった。社には祈念の餅や菓子類が供えられていたという。

大東亜戦後四十年、平和の蘇った今日も、旗こそないが、お供物が飾られて昔話はまだ生きている。

柏大明神

今から八百年程前源平合戦の時、平家は敗れ、源氏に追われ追われて「海上新田の森」に落ちのびた。「東の谷」「西の谷」「南の森」と我が陣地を敵に悟られないようにしながらここまで逃げて来たのである。

一人の若い武将が頑強なる部下を引きつれ、前の滝に見張りの番を立たせ、源氏軍を迎え討つ作戦中、突

然源氏の大軍が現れた。武将は驚き、いち早く本陣に知らさねば危ういと思ひ、大声をあげて本陣に知らせた。



柏大明神こと新田神社

しかし自分は源氏の矢にあたり無念の最後を遂げた。村人がその勇猛果敢な武将の遺骸を抱き上げて見ると、御首に「柏」の一字があった。忠勇無比の若武者に感激し、滝下に埋め懇ろに葬り、祠を作り「柏大明神」と名付け、村の守護神として一年一度のお祭りを行っている。現在の「新田神社」がそれである。

十夜守物語 とやがもり

今から八百年も前、屋島の源平合戦のあったことはだれでも知っていることである。この合戦で平家は敗れ、海路西へ西へと逃れる途中、吉井村海岸に上陸し、源氏の攻勢をさけて奥へ奥へと逃げ延び、鞍瀬川を逆のぼり、難攻不落と言われた大岩屋、赤瀧城に陣取り、多くの軍勢を各所に配備し、攻め寄せる源氏軍を迎え討つ算段をして立籠った。この時安徳天皇は御歳五歳の幼君であった。赤瀧城の裏手「御所谷」に行在所を設け、多くの武士が御守護し奉った。その時鼓ヶ嶽の麓より、風に乗って美しい鼓の音がきこえ幼君を喜ばせたという。

一方、源氏軍は大将らしき武士が九頭の馬にうち跨り、将兵多数手勢を従え、後の九騎村へ攻めこみ、夜の間九騎村を通過、念上峠の一本松の大木に陣幕を張りめぐらし、夜明けと共に一斉に関の声を挙

げた。

寝耳に水の平家の軍勢は驚き、作戦の裏をかかれ、背後より攻められては最早勝算なしと断念し「御所谷」に守護し奉る幼君の危きを思い、夜の間六名の頑強なる家来に護衛させて、ひそかに道なき山を幼君を背負い海上の「帯屋ヶ谷」の奥に逃れ、山中に身をかくした。しかし、源氏の探索の目をくらすため、河之内の郷土、名古江氏に頼る考えで、海上の奥河之内へ通ずる山中に幼君のお守りしながら十夜を過ぎた。後にこの山の地名を「十夜守」と呼ぶようになった。西の郷一帯は平家に味方する者多く、河之内の名古江氏も平家の味方だったのである。

こゝで名古江氏の最後について説明してみよう。その時名古江氏は武装して愛馬に跨り、明河路を一路「保井野山赤瀧城」へ突進していった。平家軍と合流するため明河の横海まで来た時、一人の老婆に出逢い赤瀧城への道をたづねた。すると老婆は平家軍はこの少し奥の「御水戸河原」を渡って行った所で、源氏の大軍に攻められみんなそこで切腹したと話した。名古

江氏は大いに落胆、「いかにも残念なことよ」とその場で愛馬の首を切り落とし、自分も切腹して果てたという。村人は老婆よりその話を聞き、名古江氏の清き武士道に感激し、懇ろに葬り、石碑を建てて馬もその傍に埋め、そこを首塚と言うようになった。また七月七日を命日として、その時の老婆「田の元家」の子孫が霊を慰めていたが、今はそれをする人もなく、心ある者が折にふれ香花を供えるのみとなった。

昔はその命日の朝早く首なし馬が鈴を鳴らしながら道を走るとか、その姿を見たものは短命だとか、その年不幸な出来ごとがあるとかがあって、その日の朝はみんなおそくまで寝ていたという。

話は前後するが源氏の探索は厳しく、横河原で源氏の武士が農夫に「一言尋ねるが、山の内とはどの方面か」と聞いたので、農夫は「山の内とはこの川を奥へ奥へと行った所だ。」とちがった方角を教えた。その頃今の「河之内」は「山之内」という地名であったとのこと、そして今の「山之内」が、「河之内」と呼ばれていたのである。

彼の農夫の咄嗟の機転で平家の一行は危うく難を逃れ西へ移動することが出来たものと思う。因に名古江氏に平家軍の大敗を教えた老婆は田之元家の先祖である。

海上物語

かざあな うぶやがたに
風穴と産屋ヶ谷

滑川の里を川沿いに奥へ登って行くと、道路の向うに、愛媛県道前道後第二発電所がある。この発電所の手前に現在戸数わずか二戸の梅藪という所があるが、この小部落はその名のとおり、梅のよくできる藪であったことからその名がついたらしい。

この梅藪と海上の境界に発電所があるが、この前の擁壁に煙突のようなものがついていて、そのちょうど



風 穴

真上の藪に石が見えて
いる所に「風穴」^{かぜあな}があ
り、夏はとても冷たい
風が吹き出ている。こ
の風穴から海上の方へ
登って行くと道路改修
記念碑が建っている。
この碑の横を流れてい
る小川を「産屋ヶ谷川」
と呼ぶ。

昔この川上の地に平家の落人が住みついて生活して
いた頃、この谷の奥に、子供を産むための産屋が設け
られていたことから、この谷のことを「産屋ヶ谷」^{うぶがやだに}と
呼ぶようになったとのことである。

鼓ヶ嶽

産屋ヶ谷^{うぶがやだに}から道路に出て、道路改修碑から道路沿い
に西南に向かった正面の高い崖が「鼓ヶ嶽」である。

西へ西へと追われた平家の落人たちが、明河^{みよが}から
九騎^{くき}をへて産屋ヶ谷へ逃れる最短距離の道筋であるこ
となどから判断し、鼓ヶ嶽で援軍を待ちわびつつも援
軍来らず、遂に崖より飛び下りてその命を絶ったとこ
ろといわれている。

イボとりのお塚^{つか}さん

前述の道路を崖のまん前まで上って来るとちょうど
崖^{がけ}と道路を結ぶ線の道路下に「イボとりのお塚さん」
がある。イボで困っている者が願をかけて、このお塚
さんの花立ての水をつけると、きれいにとれてしまう



イボとりのお塚さん

と伝えられており、御利益を受けた人も多いと聞く。

大道寺八伽羅之介屋敷跡

イボとり塚から百二十メートル程行ったところに伊
ヨ鉄バスの停留所があり、その前の橋を渡って少し行
くと、「大道寺八伽羅之介」の屋敷跡がある。

昔大道寺八伽羅之介という大変強い人がいて、ある



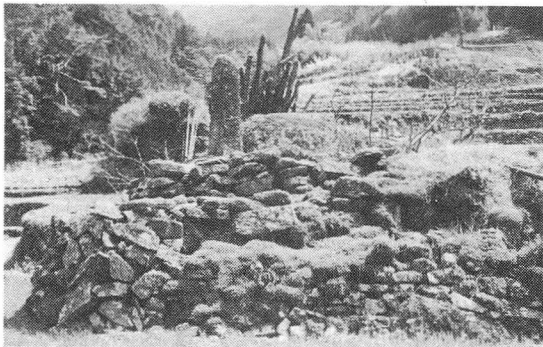
大道寺八伽羅之介屋敷跡

時、雷をつかまえた。雷は大道寺家の下僕として働かされることになった。雷は仕方なく奉公していたものの、やっぱり天へ帰りたくなり、ある日、そっとぬけ出し逃げ帰った。それ以来雷は大道寺家へ近づいたら

大変な目にあうというので、大道寺家へは決して落ちないようになつたといわれている。

八重姫様の墓

大道寺屋敷から道路を七、八十メートル登った所の右側に滑床遊歩道があり、これから塩嶽しおたけに向かって少
し行ったところが「松ひのきのもと」という所で、小さな橋
がかかっている。この橋の右上に八重姫様の墓がある。



八重姫様の墓

昔から足腰の痛い人や婦人病に悩む人がお願をかけると快くなると信じられ、願ほどの、赤や白の幟しほが幾本もはためいていた。かなり大きな構えの墓で自然石の表には文字は見あたら
ないが、墓の大きさなどから判断すると、かなり高い地位にあった姫ではないか

と思われる。最近では幟のぼりは見かけないが、信ずる人はひそかにお参りしているようである。

塩嶽しおだけ

八重姫様の墓の下の遊歩道を行くと「塩嶽」に辿たどりつく。ここで塩嶽で見た不思議な現象を述べてみよう。

時は昭和十四年にさかのぼるが、この年は日照りつづきで困った年であった。

塩 嶽

この年の七月五日から二十一日までの十七日間、夏の強い日照りで畑作物などの旱害かんがいが出始めた。

この地の百姓たちは集まって

相談の上、雨乞あまごい祈願をしようということになり、海上組に梅敷うめやぶの組も加わり塩嶽さんの広場に集まり雨乞を始めた。

塩嶽には塩竈しおかま神社まつが祀られてあり、神様を拝むことについては、現在ブラジルに移住しておられる宇野市蔵さんが神主となって拝んだのであるが、祝詞のりとがのべられない者は、ただただみんなについて頭を下げ、雨を降らしてくれるようお願いしただけであった。ところで今考えてみると全く馬鹿げたような話であるが、居並ぶ面々が相談の上決まったことは、宇野さんだけに拜んでもらったのでは効果も少ないから、ほかの者は太鼓に合わせてお不動様を拝もうということになり「ナウマクサンマンド、バサランダン、センダン、マカロシヤダ、ソワタヤウンタラタ、カンマン」と合誦がっしやうすることを繰り返し、十日余り続けたけれども雨は降らず、さすがにみんなも疲れ果て広場に敷いたむしろの上でうつらうつらとしていた時であった。突然誰かが「アリヤリヤ、水が出かけたぞー」と大きな声をあげた。みんなその声にびっくりして目を開けて



みた。すると何ということであろうか、あの塩嶽の崖下の奥は、いくら雨が降っても濡れることはないのに、水が滲み出て来ている。そしてこれが一時間もつづいて、敷いているムシロのくぼみはみんな濡れてしまう程水が溜まったのである。

「やっぱり神様が聞き届けてくれたんじゃ、もうすぐ雨が降るぞ。」と口ぐちに天を仰いで一同は喜んだが、本当に降ったのはそれから四、五日後の二十一日であった。神様の前でお不動様の経文を唱えて雨乞いをしたのは、今考えると随分ふつりあいな事であるが、それにしても、あの日照りつづきの最中に、あそこから何故水が湧き出たか、今以て何とも不思議な現象であった。

お帳塚さん

滑川の「かいもり」というところに、「お帳塚さん」といわれる塚石が立っている。かなり大きな塚であり、浅く彫りこまれた文字の感じでは、人の墓では

なさそうである。これは、昔重税に耐えかねた農夫が、直訴するための連判状のようなものを、村役人に見つかってはいけないので埋めたものだと言われている。



お帳塚さん

倒れなかった松の木

バス終点の駐車場に一つの不思議な話が残っている。「三日三晩倒れなかった松」が生えていたということだ。それはここにずいぶん大きな松の木があって、村人は「天狗のとまり木」だと言っていた。しかし、松は次第に大きくなり、田畑の日陰になるので伐る話になったが、村人の中には伐る者がなく、他所から伐る

名人を雇って、この木を伐り倒すことを請け負わせた。木こりは三か所に受け口を入れて伐ったがどうしても倒れず、遂に発狂して死んでしまったという。

結局この松の木は松山の大山寺再建の用材に使用され、それが記録に残されているという。

相名の峠物語

相名峠の麓に真五郎さん夫婦が生活をしていました。魔がさしたもののか、嫁さんは峠の向こうに恋人ができました。そしてとうとう嫁さんは、真五郎さんを捨てて峠を越えて恋人の許へと出奔することになりました。

名にしおう険しい相名の峠にさしかゝったとき、不意に狼の群に襲われました。夢中で木に登って逃れようとしたが、狼の大群にはかきません。声を限りに助けを求めましたが、人里離れた相名の峠、誰も来てくれるはずがありません。

「真五郎さん、助けてーっ。」と嫁さんは最後の悲鳴を残して狼に食われてしまいました。今はの際に呼んだのは恋人の名ではなく、捨てたはずの夫の真五郎さんでした。

やっぱり嫁さんは、真五郎さんを愛していたのですね。人々は哀れんで次のように小唄で語り伝えていきます。

『相名の峠は人遠や

真五郎恋しやオモの木や』

オモの木とは嫁さんが登っていた木の名でした。

がまん強かった

綱右衛門

弥助成の綱右衛門と言う大へん力持ちのお杣さん（きこり）がおりました。

一日の仕事がおわると松の尺角棒に、道具一式を



くくりつけて肩に担いで帰っておりまして。

ある時、念上の峠を帰っていると、谷間に狼がいました。じいさんは一つ脅かしてやろうと、力まかせに大きな石を蹴落しました。狼は怒って唸り声をあげて追って来ました。さすがのじいさんも万一に備えて、鉞の刃がけをはずして身がまえながら帰って来ました。狼はお薬師様あたりまでついてきて諦めたそうです。

ある時、庄屋さん
は用があつて駕籠に
乗って、丹原方面に
出かけることになり
ました。じいさんは
駕籠舁の相棒として
雇われました。

カタギ坂まで行く
と、じいさんの方か
ら「肩を代えるか
な」と言いました。

すると本職のかごかきは「素人とかごをかくと、しよつちゆう、肩、肩というので面倒なことだ」と侮って言いました。

じいさんは「フン」というと、それからはどうごとと押しまくるようにかいて行きました。

千原まで来ると、本職の駕籠かきのほうがたまりかねて、かごを放りだしてしまつたそうです。どちらも随分がまん強かつたものですね。

節分に豆を

まかない渡部家

昔、石鎚の天狗に追っぱられた鬼が、ちよくちよく滑川の里へおりて来てはわるさをして、里人たちを困らせていました。滑川に渡部という大へん武術にすぐれた侍がいて「よし、わしがその鬼をこらしめてやろう。」と、ある日鬼が出て来るのを待ちかまえて、

見事その片腕を切り落としてしまいました。

鬼はびっくりして逃げ出してしまいましたが、腕がなくては山の仲間のところへも帰れない。「どうかしてあの片腕を取り返したいものだ。」と、考えたあげく、おばあさんの姿に化けて、もう一度滑川の里へ引き返し、渡部家にやって来ました。



ちょうど節分の

日で、渡部家では
いろりで豆を炒っ
ておりました。お
ばあさんに化けた
鬼は「私は鬼退治
の話を聞いてまい
りました。ぜひ其

の鬼の腕を見せてください。」と頼みました。「はいはいこれが鬼の腕ですよ。」と、家の者が出してくれたとたん、おばあさんはもとの鬼の姿にもどり、その腕を抱えると脱兎だつとの如く逃げ出し石鎚山へ帰ってしまいました。それからは悪い鬼が滑川へ出ることもなくな

りました。

滑川の渡部の姓を名乗る家では、節分の日に豆を撒かなくても鬼の方が逃げってしまうから、豆撒きの必要はないと言われています。

また節分の豆は、日が暮れてから灯をつけて炒るものではないと今もいい伝えられています。

餅もちを搗うかなくなった

家の話

年の瀬も押し迫って、どの家でも正月のお餅を搗いていました。ある一軒の家でも餅搗きでみんなが忙しそうに立ち働いていました。

子沢山の昔のことで、小さい子がぐずぐずとむずかりました。お父さんは、「そんなにくじくるんじやったら、オーンにやってしまうぞ。」と叱りつけました。すると家の外から大声で、「オーンにくれ。」と恐ろし

い大きな手が、障子をつき破ってさし込まれました。お父さんは突差の機転で子供の代わりに臼の中の熱い餅をつかみざま、その大きな手にのせました。

怪物はその餅を、「フーフー」吹きながら立ち去ってゆきました。

それから此の地方では、「オーンにやるぞ。」「オーンがくるぞ。」とかいう言葉は全く口にしなくなり、正月の餅も搗かなくなったそうです。

牛鬼の墓

盗人滝より約六百メートル位山道を登って行くと、右と左に別れる所があり、右が「前入らず山」左が「奥入らず山」といふ。

此の両方の山を住む場所として牛鬼という怪物がいたそうである。村人を毎年襲ったり食い殺したりするので、村人は困り果て、牛鬼を退治することになり、何回となく話し合うのだが名案もなく、悲しみに明け

暮れていた。

ある夜皆が集まって相談をしている所へ村でいちばん年長の男が来て「入らず山」へ周囲から火をつけて焼き殺したらどうかと言ったので、一同それは名案とばかりに大喜び、早速、火道を作り周囲から火をつけた。

見る見るうちに「入らず山」は黒煙を上げて火の海となり、牛鬼は焼死した。みんなは恐る恐る牛鬼の骨を埋める相談をして、怪物の祟りのない様に、景色のよい「くい野」へ負いあげたのであるが、なんとその重さは七貫半（二十八キログラム余り）もあつた



牛鬼の墓

そうである。村人は懇ろに石碑を立て香花を捧げて弔った。

それから昭和の現代まで「くい野牛鬼の墓」と言い伝えてお祭りをして

神木のたたり

氏神様の境内の大きな木を伐ることになりました。

昔のことで木を伐る道具は鉞まさかりしかありませんでした。お杣さんそま（木こり）が「カツン、カツン。」と一日中鉞まさかりで伐りました。けれど大木なのでとても一日では伐り倒せません。伐りかけにして夕方家に帰り、また翌日やってきました。ところがどうでしょう。昨日一日かかって伐った木端こっばが全部ひっついて、元通りになっなってしまいました。

仕方がないので、また一日中かかって伐って帰り、三日目に行つて見ると、また前のように元通りになっなっていました。お杣さんは考え込んでしまいました。

そこへ一人のお婆さんがきました。そしてお杣さんに、「木端こっばを焼いてしまったらどうだろう。」と教えました。お杣さんはその通りにして難なく大木を伐り倒たしました。

しかし、木端こっばを焼いたらと教えたお婆さんの家では、のちのちまで不幸が続いたといいます。

ぬすびとだき 盗人滝の話

現在海上かいしよ入口に道路改修記念碑があるが、そこより

約百メートル位山道

を行くと、「帯屋おびやヶ

谷河原たにかわら」の横に岩屋

がある。横二十メー

トル、奥行五、六メー

トル位あり、大雨が

降つても濡ぬれない岩

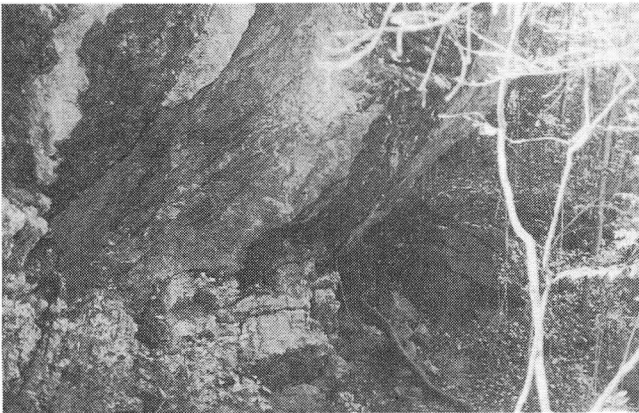
屋で、そこに昔から

盗賊が住んでいた。

そして滑川附近、河

之内、明河、遠くは小

松あたりまでも出沒



盗人滝

してお金や物を盗み集め、豪勢ごうせいな生活をしていたそうである。そのあたりは景色が美しく滝となって流れ落ちる水しぶきは白糸の流れる様な所である。

そして、その美しい風景そのままに盗賊とは言えど心優しく、人情味に溢れあふ、貧乏人の願いを優しく聞き、金でも食器類でも衣類でも、惜しみなく貸し与えたそうである。しかし人様の物を盗むことにおいては変わりなく、盗人の名は残り、この滝のことを人呼んで盗人滝と呼ぶようになった。

福見観音さんの御利益りやく

山之内福見の観音さんの靈驗あらたかなことは、広く語り伝えられています。

滑川地方は、昔は、楮こうぞという紙の原料になる木を沢山栽培していました。

ある年の夏の頃、その楮に沢山の毛虫（ヒユウジ虫）が大発生し、見る見るうちに楮の葉を喰いつくし

てしまいそうになりました。「これは大変だ。」と早速みんなで、福見さんにお願をかけました。

すると急に空を覆うばかりの鳥かかしの大群が飛んできて、忽ちたちまのうちに毛虫を食ってしまいました。おかげで平年通り楮の豊作を見ることができました。鳥は福見さんのお使いだそうです。

九騎くき鉦山

九騎くき鉦山の歴史は非常に古いといわれています。

別子鉦山は、元禄三年（一六九〇年）住友吉左衛門により発見されたと聞いておりますが、九騎鉦山は別子よりもずっと古く寛永十三年（一六三六年）と伝えられております。当時松山藩主松平定行公の時代に九騎部落の上の方で鉦脈が発見されました。

初め四、五人で掘りはじめたが資金が続かず、一時中止、また、資本家が現れて掘りはじめるといふ風で、明治九年までに鉦主が十人以上かわったと伝えられて



九騎鉾山の坑口

おります。明治九年周桑郡志川村来見に郵便取扱所が出来た頃から、また鉾主が現れて掘りはじめました。明治十年には人夫も大勢になって、九騎部落もなかなかに繁盛はんじょうしたとのことです。

また部落より一キロメートル奥地に製錬所を造り掘り出した鉾石をすぐに製錬したそうですが、何分にも便利の悪い所で、赤字続きのため中止、閉山になったそうです。その後もまた新しい鉾主が現れて大正初期から昭和の初期まで採掘が続きました。その後閉山し

てまた昭和九年に朝鮮製錬株式会社によってはじめられ、昭和十年、十一年、十二年と採掘量も次第に多くなりました。滑川なめかわの男達は鉾石を馬の背に乗せて毎日約一キロの道のり

を運んだものです。鉾石は四坂島に送られておりまし

たが、質も非常に良く、また銅の含有量も高かったと聞いております。昭和十年頃は九騎部落は大変繁盛しておりましたが、その後日中戦争勃発ぼつぱつと共に若い者はだんだんと減り、ついに十四年閉山となりました。

昭和十三年頃一番人夫の多かった時は、所長以下八十名といわれておりました。坑口は六ヶ所あり、製錬所の跡も今なお残っております。

土谷

継母まははの涙

滑川なめかわや鞍瀬くらせの谷にやっと人々が住みつきはじめ千原あたりにも、貧しいながらも生活の煙が立ちそめた時分のことです。この千原に乳飲児ちのみごを残して、妻に先立たれ、ほとほと困り果てている一人の男がいました。

ちょうどその頃、亭主に死に別れ乳飲子を抱いた女がこの地に流れついてきました。やがて二人は結ばれ

て一緒に暮らすことになりました。しかし貧しい昔のこと、一つ家に二人の子供を育てることはとても出来ません。嫁さんは考えたあげく、二人の子供を対岸の千羽ヶ嶽に背負って行きました。そして自分の子には藁束を、先妻の子には傘をくくりつけて、何十丈の嶽の上から谷へ落としました。藁束をくくりつけた我が子は、その藁束を血に染めて無惨にも絶命しましたが、傘をくくりつけた継子は、幸運にも落ちる途中傘が開いて命が助かりました。

嫁さんは泣く泣く、死んだ我が子と助かった継子を背負って家に帰りました。

それからは継子を我が子以上に可愛がり大切に育て上げました。成人した子は母を大切にし、一生仲よく暮らしました。

年老いて母は病み臨終が迫ってきました。母の臉にやきついていた血まみれのわが子の姿は今はなくお地蔵さんに抱かれ嬉々として戯れている子の姿が目に見えました。そしてまた感謝の涙に咽びながら手を合わせて伏し拝む先妻の姿もありました。



実子と継子の二人を投げ落した千原 千羽ヶ嶽

母は「これでよかったのですよ」とやさしくうなずき、かすかな微笑みを口許に残して、安らかにみ仏のもとへ旅立ってゆきました。土地の人々は血に染まった藁になぞられて、地名を「千原」と呼ぶようになったといえます。

土谷 怪異物語

夜な夜な女が添い寝していた話

まだ土谷が殆ど開けていなかった頃のことである。肝の太い二人の兄弟が、根引峠の麓あたりで、小



屋掛けをして開墾に励んでいた。一人ずつ一晩交代で小屋に寝泊りしていたのだが、夜中にふと目が覚めると側に女が添い寝していた。気付かれると女は消えるように立ち去って行くのだが、このようなことが毎晩のように続くのであった。兄弟は気味が悪くなつて相談の上、小屋を他へ移したが、それからは何も出なくなった。もとの小屋床は魔の道にあたっていたのだということである。

ながぶち 長湫の怪

田桑発電所の放水路の下手の湫は、長湫といっている。



長湫の怪

だんだん深みへ入って行くのである。

そこへ又一人の男が通りかゝりふしんに思い「おういどうしたんじゃ」と大きな声で呼びかけた。川の中の男がハッと我にかえった時には、鴨の姿はどこにもなく、身は湫に溺れる寸前であった。あるいは湫の魔物に誘われていたのかも……と男は身ぶるいしながら人に話したという。

ある時一人の男がこの長湫の側を通りかゝると、一羽の鴨が流れていた。男はこれはよいものを見つけたとばかり、川に入って拾おうとした。しかし、なか手が届かず、

貝坂の無縁墓地

落出の少し奥、貝坂の上の方に、誰も立ち寄らない一群の無縁墓地がある。草が生い茂っていたが、先年郷の大火の時に不思議にもそこだけは、ぽつんと焼け残った。誰いうとなく、ここの墓石にさわると荨麻疹が出ると言われ、恐れて近づく人もない。

本谷の白山権現

三島神社の前の道を六十メートルばかり登ると、道端に小さな祠が道を背にしてお祀りしてある。年寄りたちは「白山権現」と呼んであがめている。昔は道に面して祀られていたが、前を通る荷馬がたびたび転落するので、後向に鎮座をお願いしたと伝えられる。剣のお好きの神様とかで、木刀等も献ぜられていたと言う。



道を背に鎮座する白山権現さま

土谷物語

お頭中島七兵衛翁

土谷には農業用溜池が、ジュル谷、七郎ヶ谷、仙道休、と三か所ある。いづれも土谷のお頭（現在の



中島七兵衛が築いた仙道休の池

部落長) 中島七兵衛翁(家号茶七)

(文政頃の人)の

築堤である。なお、一か所、今のバス停二子松前小谷に、築堤の構想があったがこれは未着手に終わった。人々は「茶七のおじさんの造った池」と言って遺徳をしのんでいる。

重五郎さんの桜

土谷の重五郎さんは旧国道開通後、初代の道路工夫を勤めた人であって、今は殆ど枯れてしまつて余り残っていないが、旧国道松皮峠前後の道端の大きな桜の木は、重五郎さんが植えたものだという。

コド峠東側のお地藏さん

土谷旧街道コドの峠を東へ二〇〇メートル程下ると、道端に一基のお地藏様がお祀りしてある。

文政の頃阿波の国(徳島県)の藍商人が集金の帰途、こゝで強盗に襲われたことがあった。危うく難は免れたものの、ここは、危ないところであるというのでその後阿波商人たちはこゝに地藏尊を安置して旅人たちの安穩を祈ったという。



コド峠のお地藏さん

「ハメガシラ」の古戦場

落出のトンネルから左へ旧国道を行くと、三方を川で囲まれた岬のようなところへ出る。蝮まむしの頭に似ているので人々は「ハメガシラ」と呼んでいる。昔ここに小城とりでか砦とりでが築かれていて「ハメガシラ城」または



三方を中山川に包まれたハメガシラ城趾

「亀甲城」と呼ばれていた。対岸の丸山の砦とりでと交戦し、無惨にも敗退した。それ以来夜な夜な首無し馬が徘徊する等と伝えられる。今は無いが川岸の竹藪は「いらすの藪」と呼ばれて人々は近づかなかった。

道端に小さなほこらが祀まつられている。

土谷三島神社縁起

土谷三島神社縁起については、昔、ある農家に記録が保存されてあったそうだが、いつの頃か、「このよもったいうな勿体ないものを家においては畏おそれ多い。」と、神社の祠ほくらに納めた。その後どうなったか誰も知らないが、あたら貴重な古文書をなくして残念なことである。しかし、古老たちは次のように語り伝えている。

いつの頃か、伊勢の土山つちやまの神主と氏子が紛争をおこした。和解が出来ず、神主は御神体を背負い、いづこにか鎮座ちんざの地をと、諸国を遍歴したのち土谷についた。土谷と土山の地名がよく似ているのでこゝに鎮座ちんざすることになったというのである。当初は札場ふだばの川向このの小高い場所と定め、そこに御弊ごへいを立てておいた。ところが、一夜明けてみると御弊は本谷の現神社の地に移っていた。これは御神意であろうと、現在の所に社殿を造営した。



土谷三島神社拝殿に揚げられている三輪田米山筆「三島神社」の扁額

境内に大杉があったが、松山城築城の際に用材として伐採された。大杉は奥の方に傾いていたので伐るとき下手の宅地から綱で引張っていたが及ばず、本殿に倒れかゝり本殿は倒壊した。藩候（殿様）より松皮の藩有林を下さり本殿は再建された。

拝殿には、三輪田米山先生の筆になる「三島神社」の扁額が掲げている。

米山先生は大変な酒豪（大酒のみ）であった。揮毫をお願いする時も、お酒でおもてなしし、大分召上がったところでお願いすると「この位の酒で字が書けるか。」と、とうとう三升位酒を召上がり、それか

ら、やおら額に向かい一気に書き上げたということである。

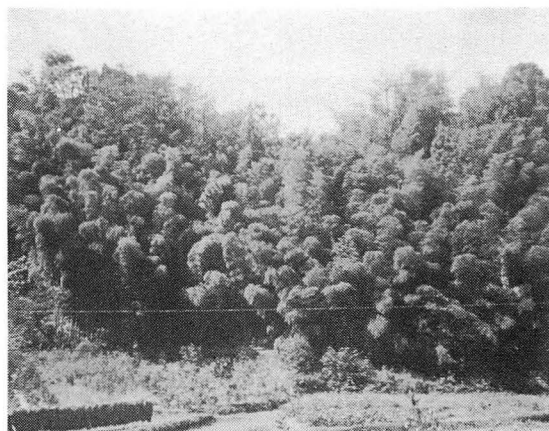
筆にたっぷり含ませた墨がパッと落ちて、力強い一点を残しているが、一説には、筆の代わりにわらを束ねて使ったとも言われている。

また拝殿の欄間に三十六歌仙の絵馬が掲げられている。絵師に依頼した時「わしの絵に似合う字を書ける者がいるのかと」大言を吐いたが、絵馬に書かれた歌の字を見ると「これはお恥ずかしいことを申しました」と低頭したという。

土谷熊野神社縁起

土谷橋の後に権現山と呼ぶ小山がある。明治の頃までは熊野権現様がお祀りしてあった。後、三島神社境内にお移したが、社跡は残っている。お祀りしたのはいつの頃か不明である。

ある山伏が、御神体を背負って来て土谷橋の西の袂で休んでいた。いざ立とうとすると重くなってい



熊野神社旧社趾の権現山

て立つことが出来ない。御神意を伺うと、前の山におりたいとの御神託で、ついに比処にお祀りしたとのことである。

当時は祭礼には素人相撲等で大変賑にぎわった。地元では濁り酒を造って腹いっぱいお接待したという。

ある時、子供が御神体をうずみ出し、参道をごろごろ転がして遊んでいた。大人が見つけて叱りつけ、御神体を御殿へお納めした。その後御神託があり「子供と楽しく遊んでいたのに、大人どもがいらざることによって止めたてした。」と大変なお腹立ちであったという。

土谷靈異記

忠作どんは随分働き者でした。人々の休む日でも一人だけ働いていた。氏神様のお祭りの日でも一人で山小屋に行つて働きました。夜になり小屋の炉端で寝ていると、誰かが入つて来ました。見ると一人の女が炉端に坐りにやにや薄気味悪い笑みを浮かべながら、袂から何か出して炉端に並べています。見ると人間の生首です。忠作の身体は金縛りかなしばりのようになり生きた心地もしません。すると一人今度は白髪の老人が入つて来ました。女は急いで生首を袂に拾い入れましたがまだ立ち去ろうとはしません。老人は、一寸の間たたら佇んでいましたが、やがて出て行きました。女は又生首を並べ出しました。しばらくして先刻の老人が堂々たる体格の一人の山伏を伴つて戻つて来ました。これを見た女は、顔色なく慌あわてふためいて首を拾い込むと、風のようにすり抜けて逃げてゆきました。老人はずっと

立っていましたが夜が白みかける頃いづこともなく立ち去りました。後で氏神様の御神託がありました。

「わしはあの時年に一度の祭礼で大忙しであったが、氏子の者が危難に遭っているのを放っておけず、とんで行ったがわしの力だけでは及ばないので八幡様の助力を頼んだ。年に一度の祭礼の時ぐらいは、仕事を休んで貰いたい。」と云われたとか。白髪の老人は氏神様、山伏は八幡大菩薩の化身であったのです。

東谷

お小左衛門さん

今から二百六十年ぐらい前、お小左衛門さんと呼ばれる名主さんが、東谷一ヶ谷恵雲部落に住んでいた。

代々続いた家柄で、特に観音信仰の厚い両親に育てられた故もあってか、慈悲心の深いお方であった。

家の近くに、万松山安国寺ばんしょうざんがあつて、朝な夕なに、鐘の音や読経どきょうの声を聞いて育つた。長ずるに及んで、

益々名実ともに長者の風格を増し、世間の人からも、生き仏の再来のように信頼しんらいと尊敬そんけいを受けていた。

近くに夫婦げんかが起これば駆けつけて「お前等二人は、あれ程仲よく結ばれたのに、今更別れるの、死ぬのとは何ごとか、昔を思え」と、あるいは叱りまた論ろんし仲裁し元の鞆たもとに納めたり、部落内の不仲、いさかひも誠を尽くして長袖ながそでさん（神官、僧侶の別称）も及ばない名仲裁ぶりだった。

またある時、貧乏びんぼうのため病人や子供に与える食物がないと聞くと、自分の食べ物まで我慢して持って行きこれを食べさせ、子供なら早く大きくなれと、病人ならば早く元氣を取りもとせと、勢いづけて生きる勇氣を振るい起こさせた。そしてその喜ぶ笑顔を見て自分の喜びとして満足した。

そればかりではない。ヤレ水害だ、ヤレ旱魃ひでりだ、悪疫流行えきだといえ、すぐに自らの勞力、資金を出して世話をした。今で言う社会福祉こうけんに貢献するなど、あらゆる方面に活躍した人である。

こうしたお小左衛門さんの善行は、近郷きんごうはもちろん

遠くまで高く評判になって藩の役人にまで届いた。

しかしお小左衛門さんは、いささかも自慢する気配もなく、むしろ未だ至らないことを憂うるタイプだった。

老齢になって、ある年、家の下手しもてに流れる小川で捕らえた小魚の骨が喉のどに刺ささり、どうしても抜けない、三日三夜苦しみ通し、さすがのお小左衛門さんも弱り、明日をも知れない身になった。このことを聞きつけた村人は、「これは大変だ、何としてもお助けせねば相済まない」といろいろ相談した結果、近くの安国寺へ集まり、和尚さんに頼み、観音さまのお助けにすぎるより他に途はないと村人総出で祈願した。

その真心まごころが通じたのか、お陰で翌朝には、あれほど頑固がんこな骨も抜けてケロリと治なおり、お小左衛門一家を始め村人の安堵あんどは言うまでもない。

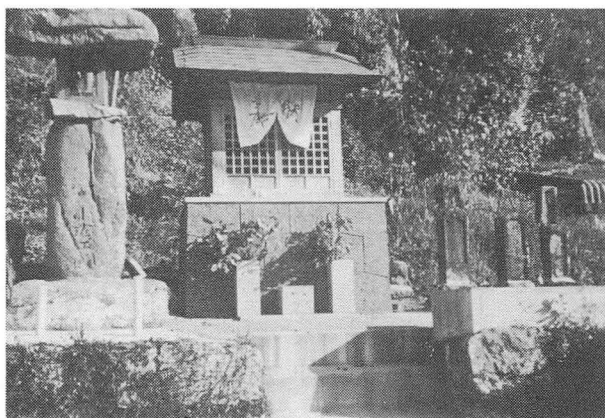
この時の苦痛と、治った喜びが余程印象に残っていたものか、死ぬとき「わしが死んだ後は、仏になって魚の骨が喉に刺さって苦しむ人があれば助けてあげろ。」と言いい残してあの世に旅立った。

それからと言うものは部落の人で魚の骨が喉に刺さった時だけでなく、刺さし傷、突つき傷、さては食あたりにも頼んで治してもらおうとの噂うわさが広がった。

村人は助けてもらったお礼とお小左衛門さんの人徳を後世に伝えようと相談し、祠を建て毎年旧八月二十一日を卜してお祭りするようになった。

この祠は東谷、安国寺参道の西麓ふもとに、建てられている。がっちり自然石で固められた石段の上に間口二メートル、奥行二、五メートルの神殿は由緒ゆいしょの深さを物語っている。

祠には紅白の幕が張られ、いつも新しい果物やお菓子が供えられている。それ程根強い信仰があるのは、人徳のお陰という



お小左衛門さんの碑

ものである。

墓石には「義山宗忠居士、享保十年十一月一日」と記され、傍らに自然石の常夜燈が立ち、その裏面に「嘉永三年七月吉日、小左衛門」と刻まれている。村人が彼の徳を偲び、心の拠りどころとして寄進建立したものと思われる。

永野の一字一石供養塔

文化五年というから、今から約百七十年前の話である。則之内永野部落に、屋号を「中の原」、当主（その時の主人）を中岡長助と呼ばれるたいへん実直な人が裕福に暮らしていた。

ある年、厳しい冬も過ぎ、のどかな麦熟の好季節になったので、花ならつぼみの二八（十六歳）の娘を連れ、友人五、六人と共に長年の夢であった安芸の宮島参詣に出かけた。三泊四日の当時としては珍しい長旅であった。予定の通り三津浜で一泊し、翌日は

早々と船で内海に出る。沖は波静かで点在する島々が、次々と迎えてくれ、またその島々が去ってゆく。山育ちの彼等にしてみれば、見るもの聞くものが珍しくまた驚きであった。幸い往きの船は鏡の上をすべるように走ってくれた。

無事に宮島に着き、夢にまで見た日本三景の一つである景観に心打たれながら、神前に額ずき、家内安全五穀豊饒を祈り、その夜は島内で一泊した。夕風の落日美と翌朝の日の出の美しい輝きは山峡のそれと、趣を異にして一入新鮮に見えたとし、磯の香りも身を引き締めた。土産物も、どっさり買い揃え、自慢話もたくさん用意出来た。総てが太平で極楽の思いであった。再び来るあてもないこの島に心を残しつつ帰途についた。ところが船がとも綱を解き暫くして、やゝ広い海原に出た途端、不思議や船は何の故障もなく、また波も静かなのに船足がパタッと止まった。

初めは海の事情を知らない彼等なので何の疑いも持たなかったが、船頭の顔を見れば真青になっている。それが土色に変わり、やがて手足がビリビリ震えか

かかってきた。いくら力の限り櫓を漕いでも船はびくとも動かない、さあ大変だ、船頭が歯をガタガタ鳴らしながら言うことには「これは鱧に馮かれた（のりうつられた）のじゃ、この上は人身供養をしないことには、皆んな船諸共沈んでしまうぞ」そしてなお「人身供養には必ず生娘でなければならぬ」との因縁がある」と付け加えた。聞いた一同は驚くまいことか、魂消てしままい震えあがり、中には年に似合わず泣き出す者もいた。どうしても生きて帰りたいと思う一念で皆んなの目は娘の上にそそがれた。

長助親娘は身も心もあらぬ思いの恐怖に戦いた。わが娘可愛さの愛情と、誘い連れて来た友人と、その家族への義理との板挟みに悩み苦しむ長助は、胸が張り裂ける思いであった。思い余った男達は、涙をのんで泣き叫び嫌がる娘を担ぎ上げ海中に投げこんだ。この有様を見ながら、男たちを制止する言葉も術もなかった哀れな長助であった。

この地獄絵のような一刻をすぎると船は今まで何事もなかったように動きだし、船頭も力一杯漕ぎ、無事

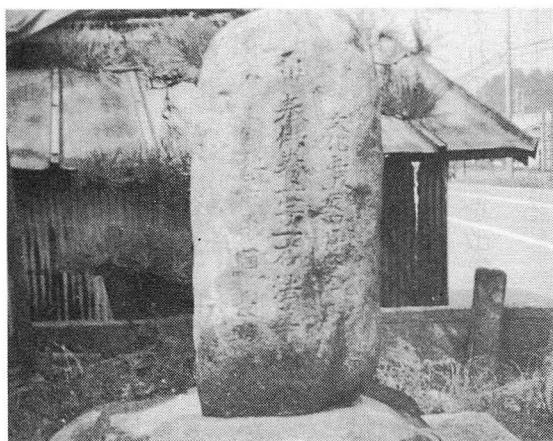
に三津浜にたどり着いたが、誰ひとりとして声もなく放心の状態であった。

普通なれば比処で宿をとる筈だが、帰心矢の如しで夜通して歩き、夜明けまえ吾が家にたどりついた。

が、大事な娘の姿は何処にもない、不審がる女房に長助は、涙ながらに事の次第を話した。女房はたちまち血相を変え、なげき悲しむ姿を長助は宥めることもできなかつた。

折角遠い海を越えて行き神仏を崇めた帰り道に可愛い娘を鱧の餌にするとは何ごとか、この世に神も仏もないものかとなげき悲しんだが、所詮かなわぬ現世の運命であった。

悲嘆の明け暮れが暫く続いたが、ある夜長助の夢枕に娘が現れ「どうしても浄土に行けず、黄泉（あの世）の旅路で六道輪廻の迷いに苦しみ仏になれない」と哀れ悲しげな訴えを聞いた。ただでさえ、わが娘を死に追いやった自責の念に苛なまれていた長助は、早速壇那寺で供養の方法を教わり一字一石の法華経奉納の法要を営むことに決めた。



一字一石供養塔

一字一石というのは省錢しょうせんより少し大きい丸く平たい石に、僧侶が妙法蓮華經みょうほうれんげきょう如来寿量品らいじゆりょうほん第一六の千八百九十五字を一字ずつ書き写して、墓に埋めるといふ大掛かりなものである。

丸い石は身寄りの者が、浜辺で拾うものの、それに僧侶が字を書き入れるものだからお布施おふせ(お礼)も米俵であつたらうし、これ程の大法要であるから、在家の人には余程の覚悟、発心がないことには成就じやうじゆしない。この大法会おこなを行つてから後に娘の姿は再び長助

の夢枕に立つこと

はなかつたという。

この永野の「奉

供養一字一石法

華塔」は中岡家の

墓地に建てられて

いたが、昭和三十

三年国道十一号線

の改修に当たり、

長助の子孫になる

人が、法要の上、小石は俵に詰めて、墓石と共に神戸市の方へ移し、手許てもとで懇ろねんじに祀りまつ、供養塔は国道端に埋もれていたものを、土地の人々の善意で、永野公民館のある川内ミニ西国第二十九番、松尾寺の札所と並び再建されている。

龍翁山、観音寺

観音寺は河之内の宝蔵寺という処にあつて、十一面観世音が祀まつられている。

いつ頃建立されたかは定かでないが、子孫である名越家の墓を調べてみると、権大僧ごんだいそうづ都法印三明院ほういんの墓石に天保元年とら寅の年十二月十三日没とあるから、今から百五十年以上昔のことである。それより古い墓もあるが風化されて字が不明である。現在も狩場と宝蔵寺の人々によつて保存されていて、十月十五日には名越白山大菩薩のぼりの幟のぼりを立てお祭りをしてゐる。昔は西山の頂上に堂を建立していたのである。

当時の狩人が鳥や獣を追つても、宝蔵寺を越えて雨

滝方面へ逃げたら、それは見逃す事になっていたという。狩場という地名の起りでもあった。

前の川を境に向かいの日浦方面には、昔火災や、病人、怪我人が多く、特に、笠方より来る駄馬や馬子の怪我が多いので、当時の人々が不思議がった。宝蔵寺の観音様は非常に霊験があらたかなため、日浦区は観音の真正面に当たって不敬になるので、罰が当たるのかも知れないという話が誰いうとなく持ち揚がった。それで観音堂を改築する時に、現在の西山の裾へお移したのである。

それから下馬坂では馬から降りて歩いたという。今の松尾坂であらう。それ以後日浦方面の災害事故が少なくなったそうである。

当時の庵主が祭事に法螺の貝を吹くと、向かいの寺や宮でも、その合図に従って祭事を行ったという。

この庵寺には、不思議な話が残っている。お使いの白蛇が住んでいて、夜な夜な近くの窪野瀬へ水浴びに通うということである。その証拠に寺の縁板が、雨も降らぬのに朝々濡れているということであった。



龍翁山観音寺

また、ある日近所の人が、急病で倒れたが医者へも遠いため、何はさておき、一番に観音様をお願いして患者の寝ている屋根の破風へ上って、箕でおおぎながら患者の名を、再三再四呼んだら、気絶した患者が生き返ったという話も残っている。

今は庵主はいないが、近くの名越家の人が庵のお守りをしている。またお堂も修繕して管理も出来ている。

成谷川の由来

今から三百年以上の昔のことである。今の惣河内神社の裏山に名越城があった。問屋の地区に弓形をした

山に城があつて、名越城と戦争をした。ところが弓形山の陣が弱くて、正月元旦城主が朝食中に敵の矢が膳を射たという。死力を尽くして戦ったが、弓は折れ矢は尽きて負けたのである。一同泣きながら川にそつて下山した。それからこの川を「泣谷川」と呼び、この山を「弓折れ山」と呼ぶようになった。

ところが何時の頃からか泣谷川は、成谷川なるたにと言われるようになった。又成谷という姓の家も現在二、三軒ある。

餓鬼が森

弓折れ山の手前に「七が森」といふ山が並んでいる。昔、その中に地震か台風の被害で山崩れがして、一夜の内に突出した所がある。これを「餓鬼が森」という。

当時の子供が鉄砲で遊んでいる内に腹を撃つて死んだのである。おそらく土地の人が供養の意味で、餓鬼が森と呼ぶようになったのであらう。

伸び上がり狸

徳吉とくよしに、名高い一本松があつた。樹齡は三百年以上たつていたという。

旅の人が休む所でもあつた。また秋祭には氏神様のお旅所にもしていた。

松の下の店が寝静まつた真夜中に、人が通ると黒い影が出る。それを見ているとだんだん高くなるという話である。

伸び上がり狸というて、人が恐れていた。土地の若者が一人で退治するといつて、夜中に待っていると、黒い者が前へ出たと思つたら、それがずんずん伸び上がるので、「こやつ糞狸くそたぬきめ」といって足でけつたら、石をけつていたという。

ある夏の夜、若者が店の縁台で涼んでいるうちに寝入ってしまった。そこへ二人の若者が来て冗談半分で近くの若宮様の境内へ、寝ている男を縁台もろとも、かいて行ってじわりつと置いて帰ろうとすると、寝て



れたことに気つき、ぐどぐど小言いいながら、縁台を運んで帰ったという。

狸に化かされた人

今から六十年程昔、徳吉の上之坂方面へ、二人の狩人が雪の積もった日に兎を追い出しに行った。ところが向こうから山路を、一人の男が棒を担いでやって来た。その男は右へ左へと行ったり来たりしている。落とし物を捜がすでもないし、うろうろしよるので、二人の狩人は不思議に思って、しばらく見ていた。ふと

いた若者がすつと立ち上がって「お前等が縁台を運んで帰れよ、おとろけが」とほざいて帰ったと言う。その後を黒い影が、ゆらゆらと伸び上がっていたのを見て、二人の若者は狸に化かさ

見上げると松の木のの上でも一匹の獣が尻尾を立てて、枝を左へ右へ行ったり来たりしよるのが見えた。これこそ狸が人を「なぶって」いるのだと気付いたので、一発ずどんと鉄砲を打つと狸は落ちた。化かされた男はそこで正気に戻ったという。

御定神さん

河之内金姓寺の近くの畑に小さな塚がある。昔、旅の修行者が来た。その人は喉に魚の骨を立て、苦しみの上歯を煩わづらっていた。修行者はある日畑を深く掘



お定神さん

り始めた。不思議に思った里人が「何をしますか」と尋ねると、わしは喉と歯を煩わづらって苦勞をしとるので、入定にうじょう（死ぬる

こと)するから祀まつってくれないか。その替わりに歯痛と喉の病気を患う人は助けてやる。と言って穴にはいったそうである。

当時の里人は塚を造り修行者を祀まつった。そして塚の元へつゝじの木を植えた。

今も六月頃になるとつゝじは真紅の花を開き、霊を慰めている。そしてこの祠ほこらに参る人は今もいる。

正夢

今から百五十年以上昔のことである。河之内の金毘羅山の奥が官山かんざんであった頃。杣そま、きこりが大木を切りに毎日通っていた。

ある夜、きこりは大木の根元の小さな穴から、地下蜂じがばちが出入りしている夢を見たのである。あくる朝、山へ行く途中で夢で見た様な木の元の穴を見つけたので掘ってみたら、小さな瓶かめが出てきた。ふたを開けてみると、昔の小銭や一分銀が一杯入っていたという。それは、だれかがばくちでもうけた金を、穴を掘って

かくして置いたが、そのまゝになっていたのだろうという話である。いづれにしても夢は正夢という昔語りである。

官山かんざんの大蛇

これも百五十年も昔のことである。

河之内の城之岸の官山で、杣そまが木を切る作業を止めて帰り仕度をしていると、熊笹のさわぐ音がした。ふり向くと大蛇が鎌首かまくび(頭のこと)をあげて杣そまに飛びかゝろうとしている。杣そまは驚いて鉦ねたを振り上げて身がまえた。両方がしばらくにらみ合っていたが、夕暮れではあるし、だんだん杣の方が弱ってきた。

ところが、氏神様の夕暮れの太鼓の音が聞こえた。はっと我に返った杣は、振り上げた鉦ねたを蛇に投げつけて、一生懸命後も見ずに山を駆け下りて帰ったが、家の者には何も言わないで、四、五日熱を出して寝ていたということである。

河之内の八軒家

大昔河之内に八軒の家があった。その人等が開拓をしたと伝えられている。音田区にある氏神様の近くに、釜衛門かまゑもんと名を刻んだ古い墓がある。当時釜かまや鍋なべを作る職人であったと思われる。また松尾坂には「かじや」という家号の屋敷があるので、刀か野道具を作る職人がいたのであらう。

音田の雨滝の近くの会堂の裏に「菊」の紋を刻んだ墓があって、「法覚道性信士、安永十年三月二十五日没」「夏屋妙盛信女、天明四辰四月六日没」と刻まれている。今から約二百年前の墓である。

また、近くの山裾やますそには、お天子屋敷という畑もあるので、昔、高貴な人が流浪されて来たのではないかと思われる。

兄弟おとどいぶち淵

今から百年ぐらい昔のことである。徳吉部落の旧県道に高い橋があった。その近くの谷川に小さな淵があって、そこで子供二人が遊んでいたが、一人の子供が淵に落ちたので友達が助けようとして、ついに二人とも淵で溺死できしした。当時の人は友情のあつい善行をたゝえて、「兄弟おとどいぶち淵」と呼ぶようになったといわれる。

そこから百米位離れた所に、地藏尊まうを祀る堂がある。水死した子供を供養するために建立したのであらう。その淵は県道建設のためにうめられて今はないが、土地の人々は毎年盆に地藏堂で供養している。

姫ひめ藪やぶ塚づかの由来

日浦部落の味間屋あじまやに「姫藪」という竹藪がある。昔、名越城なごえと弓折山の城とが戦争をして、弓折城の姫が逃げたが、味間屋の藪で捕らえられて首を切られた。

今も「首塚」の辺りに藪の名残があるが、この竹を切ると腹痛を起こすといわれている。



ひめ つか 塚
やぶ 藪 姫

金毘羅さんこんびらの方便ひんべん

出雲の神寄せの時、金毘羅大権現は欠席をした。そのわけは何かと、出雲より問い合わせが来た。金毘羅は年中多忙で神寄せに出席出来ない、一年中で一番暇なのは、三月十日であると答えた。ところが出雲より

三月十日に、金毘羅へ調査に来て見ると幟のぼりが立ち、善男善女が大勢参拝に来ていたので、一番暇な日さえこの有様なれば平日は定めし多忙であろうと、いつて帰ったという話が残っている。以来神無月でも金毘羅さんだけは、神が留守になることはなく、祭日も三月十日と共に十月十日にも行われている。寺の宝物の中に馬の角つのや天狗の爪つめがある。境内には名高い「猩々しやうじやう紅葉」がある。

法術ほふじゆつの効きく法印ほふいんさん

名越山なごえ金姓きんしやうじ寺は真言宗醍醐派だいごはである。開山由来は定かではないが、本尊は、聖観世音菩薩ほんごんである。

今から七十年位前、金姓寺へ夕方旅人が来て、根引き峠は暗くておそろしいから、土谷まで送ってくれまいかと頼んだ。旅人は危篤きとくの病人の所へ行く途中であった。住職の法印も老人で足が悪いし、雇う人もいないので、今晚は寺へ泊まれといったが旅人は泊まらない。それではこの「かんでら」を貸すから火をつけ

て、この煙管へ煙草を詰めて火をつけ、これをくわえて行くときよい。目的の家へ着くまでは煙管と、かんでらを放すなよ、途中で手放すと法をかけてあるのが解けて迷うぞと注意をして、夜の根引き峠へ旅人を見送った。

旅人は数日の後寺へ立寄って、無事に峠を越えて目的の家へ到着したと礼を言ったという。

ある夜、住職の法印さんが根引き峠を越えて帰る途中、下り道の曲がり角へ来ると、目の前が真暗になって前進が出来ないので困った。呪文を唱えて眼前を「えい」と右手で袈裟掛に切ったら、そろそろ目の前が開けてきたので無事に帰宅したと言う。

ある日、土地の男が寺へ来て、「実は法印さん財布をうしなったので家中を探しても無いし、また盗られたとも思えない、とにかく困っているから拜んで探してくれまいか」と頼んだのである。法印はお堂に入っ

し牛駄屋を探したら敷藁の中に落ちていた。

また証文をうしなった人が見てもらったら、家の南の物の下になっ

ていてというので探したら、押し入れの布団の下にあったという。それから婦人病を法術で癒したり、刃物に触れないのに桃を割ったりしたという。



名越山金姓寺本堂

かさもり

弓折山の裾に「かさもり」という祠がある。昔、

子供の頭のできものや、大人のできものを治なおしてもら
うため、土の団子を作って願をかける。治ると米の団
子をお供えてお礼参りをしたという祠で、今も狩場と東
谷小学校の下の橋の近所に残っている。



かさもりさん

伊予の善根酒屋ぜんこん

「近藤林内翁」の全盛期には、「施ほどこし米まい」といって規定
の箱に米を一杯入れて置き、諸国よりの社寺参拜者が
当家へ立寄った時には、施し米を与えることになって

いた。その日の訪問者が一人でも十人でも全部施した。
それを毎日続けたそうである。同家は「柳やなぎ曾ぞ」とい
う地酒を造って販売していたので、酒を飲む旅人には
定量を一杯施したという。

近藤家には田畑山林が多く有って、不作の年の立毛
調査には他人の土地を踏まないで、巡られる位の地主
であったと古老の話であった。

当主は俳句を愛好され、近郷の俳人も多数ここを訪
れた。俳号は「五ご揚よう」といった。



近藤家の屋敷近くの地藏尊

乃木將軍と黒尾上等兵

自由と平和主義の新しい教育を受けている戦後生まれの人は、明治大正の国是（その国の、国政上の方針）と言うべき国民皆兵、富国強兵の話はあまり馴染みないであろうが、乃木大将の至誠と厳しい私生活の教訓は、いつの時代にも共通するものがあるかと思う。

明治三十七年日本は自衛上やむを得ず日露戦争に突入した。陸上最大の要塞は旅順二〇三高地で、（敵方）難攻不落とされていた。更に日本より遥かに勝る火力戦に、わが第三軍司令官である乃木大将は肉弾戦で戦い、その年、十二月にこれを陥落、占領し世界を驚かせた。しかし多くの貴い人命を失い、そのことで非難されたことも事実であった。

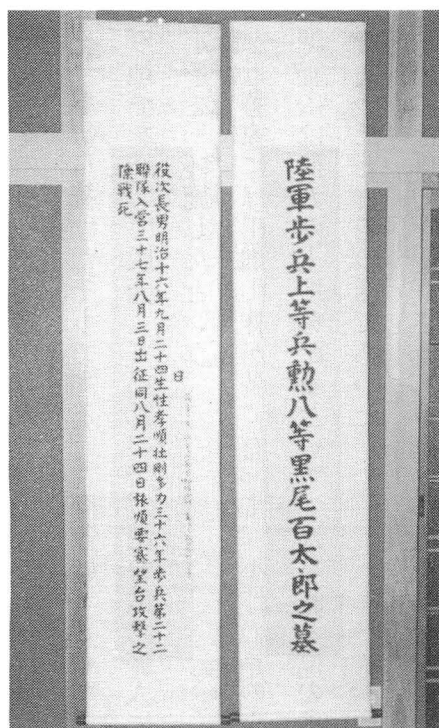
乃木希典はこの戦いで長男勝典（二十六歳）を南山で、次男保典（二十四歳）を二〇三高地の総攻撃で、戦死させている。

その散華した保典小隊長の部下に黒尾百太郎もいた。

百太郎は明治十六年九月、則之内村、一ヶ谷、黒尾役次の一人息子として生まれ、三十六年松山二十二連隊に入営した。翌三十七年八月に満州に出征し、乃木保典小隊長の部下に配属され、惜しいかな八月二十四日の第一次攻撃に当たり旅順望台付近で壮烈な戦死を遂げている。

享年（死んだときの歳）二十一歳、翌三十八年七月葬儀 戒名 勇心院忠道義敢居士 安国寺に眠る。

戦いは終わり、凱旋した乃木大将は宮内省御用掛を勤め、後に学習院院長を兼任するが、その間努めて暇をつくり、戦死した部下の霊を慰めるために墓参し



乃木大将揮毫の軸物

ていたことは有名である。

この頃、話は変わるが則之内一ヶ谷生まれの岩井禎三ていざうと呼ばれる人がいた。安政五年正月生まれで明治の終わり頃には五十歳台の働き盛り、宮内省皇室お付きのご典医てんいというから、明治天皇みづめいご不例ふれい（ご病気）の時は全力を尽くされたに違いない。そのためか、後に従六位勲五等の榮譽を賜り大正四年十二月、六十歳で東京で亡くなっている。

この岩井と宮内省御用掛かりを勤める乃木將軍との親交は当然考えられるが、この人の紹介で百太郎の墓標銘ぼひょうめいを揮毫きごうして頂いている。岩井家の墓所は東谷安国寺山内にあるので、禎三自身は度々、墓参したであらうが、乃木大將自身が果たしてここまで来たとは定かでない。

いずれにしても、岩井の尽力があつて一兵卒のため墓標銘きせうめいを揮毫きごうして頂いたことは戦死した百太郎はもちろん一家の名誉である。

その後、父役次は乃木夫妻の殉死じゆんしの報を聞き、岩井禎三を通じて乃木夫妻の霊前に香典料かうでんりょうを差し上げた。

乃木家では快くご採納されたとの達筆のあいさつ札状が届けられた。黒尾家では七十五年経った今もなお乃木大將の遺墨いぼくと共に宝にして大切に保存している。

松瀬川

和尚と狸

昔、川上の里の小川こがわに荒神橋といふ橋があり、夕方になると狸が化けて出るといふ噂うわさがあつた。

ある日の夕方、上福寺の和尚が橋の上を通りかかると、タライがくるくる回っている。和尚はこれが狸だと思ひ、「その化け方は古臭いぞ。」と言うと、タライの姿が消えてしまった。

少しゆくと、今度は大きな赤鯉あかごいがピンピンはねている。和尚は急に赤鯉が欲しくなり、手を出すとピンとはねて水中に逃げ去った。すぐさま橋のたもとで声あり、「どうじゃ、いまの化け方はイキがよかつたじやろう。」と、カラカラと高笑いされたという。

添谷そえだにの生い立ち

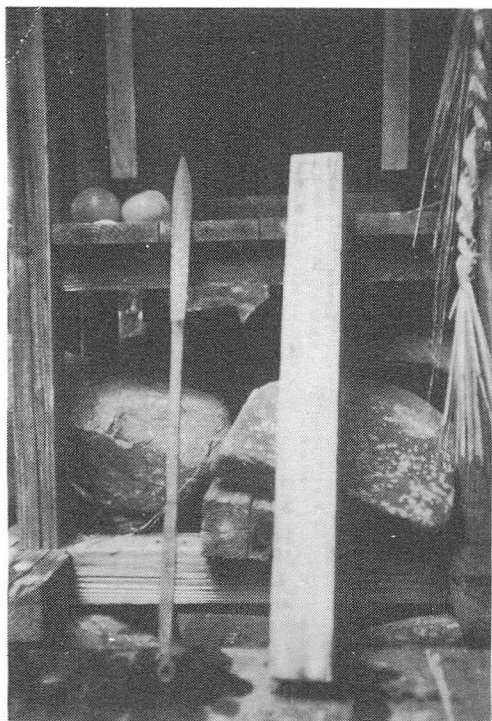
攝津の一の谷で予想外に大敗した平家は乾坤一擲けんこんいつてき一挙に挽回せんと讃岐の屋島に背水の陣を張った。

平家の運命を賭けたこの戦も、勝利の見込みなく平家の主力は海路を西へ西へと敗退した。しかしそれも海戦に巧みな予州河野一族に妨げられ、軍船の配備が十分に整わず、平家は長門の壇の浦の決戦で滅亡した。

主力から離れた平家方の一部はちりぢりに四散し、ある者は阿波の祖谷山に、伊予の鞍瀬くらせに、滑川の九騎に落ち延びた。平家の赤旗の下、侍大将渡部倉之丞もその一人で弓折れ矢尽きた倉之丞は都に残した家族の行く末を案じながらも、石鎚山系の西北の隅を夜を日について逃げ続けた。勝に乗じた源氏の敗残兵追討の手は厳しく、野鳥の羽音にも神経をつかいながらようやく松瀬川の添谷までたどり着いた。添谷を越すと西は道後平野に開け、その先は海である。海には源氏の

白旗が漲り逃れる余地はない。遂にこの地に住む気になり、木材を集めて小屋を立てて草鞋わらじを脱いだ。

その時倉之丞の持ち物は二つの鉄箱はさみばこであって、その中には自分の祖先として崇拜した霊社神と、弓矢の守護神として八幡大菩薩はちまんだいぼさつの祠ほこら、また笹穂ささほの槍、銀の延べ板に渡部家の系図等が納められていたという。この内、銀の延べ板はあるエピソードを残して今は現存しない。倉之丞は造った仮小屋を修繕し、隠遁生活いんとんに入った。きれいな水が流れ川には小魚が生息しており、野生の動物も獲れてその日の炊かしぎに事欠かなくなり、



若宮神社に奉納されている笹穂の槍

やがて、天下は源氏の手におさまり、さしもの厳しい追手も緩ゆるんできた。源氏一色に覆われた都に帰る気もしない倉之丞は武士を捨てての生活をした。月日の流れに閑の戸はなく、倉之丞も心身共に落ちついて、適当な伴侶を得て、次々に男子三人を授かり子供の成長とともに、初めの焼畑作りも追々立派な畑になった。

更に水路を築いて良田を起こし、米を作り木炭を生産したり雨具の蓑笠みのかさ編みの手内職で順次生活も豊かになった。この子供等が成人して本屋、大東、ユヅリハなどの家号で分家して発展し、今日の集落となった。明治の初期に一般農民にも姓が許されたので組中相談の末祖先の渡部倉之丞の故事に因んで姓は渡部に衆議一決して今日に至っている。倉之丞が持参した鉄箱は本屋に保存され、槍は倉之丞を祀っている若宮神社に奉納されている。若宮神社は清浄なる山の頂上に祀られ、毎年霜月十八日には神饌を供えて組中揃って祈念参拝おしたを怠おこたらない。

権田、弓矢の強弓物語ごうきゅう

昔の人里や文化は山から開けてきたと言われているが、事実松瀬川の発展も中村地域がその源であった。それを証拠付けるかのように長福寺と称する観音堂があり、この辺りに五輪の塔や宝篋印塔ほうきょういんとうが建っている。

もともとこの五輪塔は武士階級が興った平安末期から室町の戦国の世まで約六百年間の武将の供養塔墓標で、鎌倉時代が一番盛んであった。(五輪の塔とは、一番下の台を地輪、次に水輪、火輪、風輪と続き、一番上を空輪と重なる)この中村の場合真中の大きい五輪塔が主領で両側の小さいのが家臣または家族と思われる。このほか型は小さいが宝篋塔は苔むして、昔栄えたつわものどもの夢の跡をしのばせている。この塔から少し登った所に、的場まとは、権田ごんだ、上権田うえごんだの地名がある。また身を翻ひるがえすと遥か向こうに本谷川を隔てて、高知、六畝、古屋等の地名が残っている。中でも高知には日

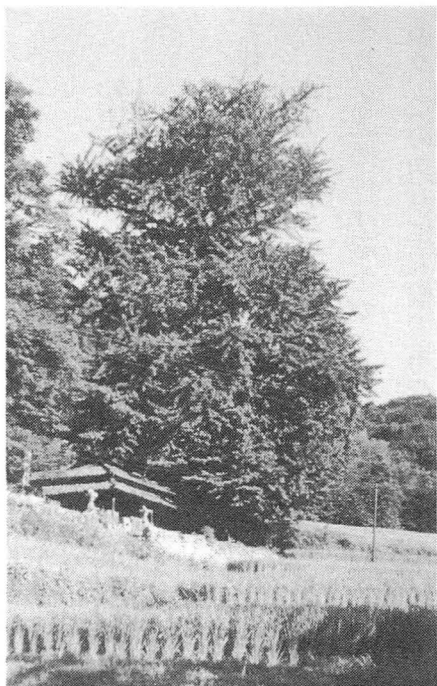
天神社の社跡やしろあとがありその右下の畑の中に十四人塚の石ぐらがあつて高知の人たちは正月や祭日には十四個の祝餅を供えて霊を慰めていたと古老の話である。戦時中食糧増産でお社跡やしろあとを開墾した際、打込んだ鍬の音が異様なので深く掘下げたら、土の中から大きな瓶がみつかり。蓋を開けると古銭がザクザクと出てきた。その時は別に鑑定もせず、一時は大石為市の所有として松山城天主閣に陳列した。なお高知には面白い伝説が残っている。時代は定かでないが、弓の達人で弓矢源左衛門という人が住んでおり向いの中村にも権田八郎左衛門という弓の名人がいた。

二人とも主持ちであつたが互いに連絡するのに矢文やぶみを用いたという。矢文は高知の下宮から、権田は中村の的場から矢文で違わず連絡したと伝えられているが、双方の間隔は今見計つて見ると五百米もあろうか、この間、矢が外れもせず正確に交換できたとは素晴らしい強弓の腕前であつたのだろう。この二人の人となりも立派で世の為人の為に尽くし権田は観音堂を守り、銀杏は同氏が植えたと言えられ、弓矢は古屋の水路を

築き、良田を開拓したと伝えられる。現在の観音堂の敷地は七名の共有物として記録され、その中に弓矢の姓も残っている。権田八郎左衛門の墓は上権田の畑の隅に苔むしている。

慈じげん限様と金こんぞう蔵院

奥松瀬川バス停川筋から、坂道を歩いて五分ほどの所が中村の集落で、ここに無住の庵がある真言宗長福寺となえ、本尊十一面観音をまつっている。あまり



慈限様が修養した長福寺

広くもない境内だが川内ミニ西国第十五番新那智山今熊野やお地藏さん四天王の礎石も残りまた、東南の隅には根廻り約八米、高さ七十米の大銀杏があり西の森にはコガの木が茂っている。石段の上の手水鉢には正面に慈限房、実元房、右に奉寄進、左側面に、文政七年と記され百六十年ほど前のものである。其の頃、慈限房という修験者が縁あってこの寺に住みつき、仏道三昧に修行していた。

身についた学問で、若い人には寺小屋式の手習いを教えた。山伏としての祈禱や呪文で病気を治し、生活の知識を与えて村人たちを助けていた。この噂が広がり仙人さま慈限さまと親しまれた。女たちが数々の品物を持参したり、日常の世話をするようになったが姦しい女の長話や、親切の押し売りなど、女嫌いの慈限さんは、これはたまらぬと遂に寺を逃げ出してしまった。その後慈限さんはしだ尾谷に入り、朝夕近くの滝に浸り、水垢離をとって仙人のような荒行をしていた。

滝の岩に呪文を唱へつつ観音像を刻む槌音が静かな谷間に木霊した。仙人とは深山幽谷に住み、不老不死

の法を修め、神変自在の法術を得た人をいう。一方長福寺で教えを受けた上之段の権田半次郎は恩師の妙術と教訓が忘れられず再び慈限さんを訪ね、山伏としての修練を身につけて金蔵院の名を貰った。その間に不思議なことも度々経験した。ある日炊事を預かる半次郎は、「お師匠さん明日炊く物がございません」と言えど「心配するな朝起きて探してみよ」と言われるので不安ながら翌朝起きてみれば、確かにその日に必要なものが揃っていた。そんな事が度々あった。明日の天候の事や今年の農作物の吉凶、さては何日は人が来るとかその予言が皆ピッタリの中する余りの正確さに気味が悪くなった。そのような日が暫く続いたので半次郎も少々恐ろしくなり、我が家も恋しく帰りたくなった。理由を考え意を決して、「お師匠さん今頃は麦が熟れているかと思しますので一応お暇を頂戴しとうございます。」

と言うと、慈限さんは半次郎の本心が分からないはずもなく、「お前も永い間里へも帰らずよく辛抱したな。また来たい時はいつでも訪ねて来い」とやさしく

見送った。その後、再び半次郎は師匠をたづねて山へ行ったがもう慈限さんの姿はなかった。ただ滝の岩に慈限さんの足跡がハッキリ残っていた。以来村人はこの滝を慈限滝と呼ぶようになった。落胆と悔し涙で上之段に帰った半次郎は、百姓をするかたわら習い覚えた祈禱きとうや呪術で村人を助けていたが寄る年波には勝てず枯木が朽ちるように八十九歳で天寿を終えた。仏道を悟った故か、死期を知っていて、家族縁者を集め仏壇に手を合わせ礼拝の後に、「あゝ有難やお前らはあのお姿が見えぬか、阿弥陀さまのお姿ぞ、今お迎えを頂いたのでこれからお供をさせて頂く。仲良く暮らせよ。」といい残り眠るように旅だった。上之段の萩田屋敷に墓があり金蔵院と刻まれている権田僧都正随不生位の位碑は子孫の権田進氏宅にまつてある。

墓はかが成なるの由来

奥松瀬川にはその昔、部落財産として山林が五百町

歩、今の五百ヘクタール余りあって、その広い区域内には金作りとか百俵畑などの作地跡があり、与平屋敷とか石原屋敷跡も残っており、中でも横谷の頂上は、隣村山之内との境界になっていてかなり広い平坦地があり、人呼んで「墓が成」と言い哀れな昔話が残っている。どこから来たか佐平というお爺じいさんが、年のころ五、六歳の女の子を連れて移り住んでいた。名前をおさよと呼び、故あってこの孫娘と二人暮らして、焼畑でとうきび大豆ソバ等の畑作物を作り暮らしていた。然しその近くには猪ししヶ藪やぶという猪や山犬が出没する寂しい所があるので、佐平は絶えず気をつけていた。時折り人里へ塩や、醤油など、買い物に出かけるが、そのような時は、おさよに、小屋には神様が祀まつつてあって守って下さるから決して外に出てはいけないよとくれぐれも注意していた。ところがあるときおさよは寂しさの余りお爺さんの注意も忘れ、小屋から出て、家の周りで遊んでいた。これを見つけた猪ヶ藪の中から数匹の山犬がおさよに襲いかかった。数倍も強い山犬に喰いつかれては何ら為す術もなく泣き叫びながら

哀れや遂に山犬の餌食えじきとなつてしまった。虫が知らせ
たものか佐平は買ひ物を早目にすませ急ぎ帰つてみれ
ばおさよは見えず探してみればこのありさま、破れた
着物や骨等を拾ひ集めて一夜を泣き明かした。自分の
不覚を責め、おさよの霊を慰めながらも遂にこの地に
いたたまれず佐平は頼るあてもなき旅に出て行つた。
数年を過ぎて今度は鞍瀬の佐伯久左衛門一家が入殖し
て来た。最初は変わった事もなかつたが不思議なこと
もあるもので元氣な子供が急に訳も分からぬ病氣に罹かか
り、次の子供もまた病氣になつた。

人里離れた山中ではあるし、途方に暮れた末に何か
因縁があるに違ひないと思ひ近くの山伏に拜んでも
らつたところ、案の定、無慘に食ひ殺されたおさよが、
霊界にさまよい、そのための祟りたたとわかり、久左衛門
は遠い石屋を訪ね、お地藏様を買ひ求め、背負つて帰
り、屋敷の上の小道のそばへ建立した。その事があつ
て以来この地に山犬の被害や病氣もなくなり、佐伯久
左衛門も出世して松瀬川の在所へ轉居している。今に
残る三界万霊の佐伯久左衛門の名前入の供養塔も建ち、

其の後はこの地を「墓が成」というようになった。

大崩潰おおつ物語え

今から百六十年ぐらい前、久米郡松瀬川村音田での
話である。この頃音田と川筋との間に今も残る神屋
敷、山の神屋敷、名本屋敷の地名があるが、この名本
屋敷一帯に七、八軒の家が寄り添うように住んでいた。
その中に山里には稀れな美しく氣立ての優しい娘が
いて村の若者達の憧れの的になつていた。

春は三月花の頃、金毘羅様のご縁日と言うので娘は
友達と共に参詣に出かけた。舟山峠を越えて河之内徳
吉に下り、金毘羅宮の高い石段を登り無事参拜しての
帰り道、近くの雨滝神社へも立ち寄つた。娘達はひよ
んの木の陰でしばらく憩い、雨滝も恐る恐る見おろ
した。溯の水は青々と澄んで底知れぬ深さを湛えてい
た。その美しさに見とれていた時、娘は大切にしてい
た櫛を溯の中に落としてしまつたが拾うことも出来ず、



龍宮さん参道

あきらめて帰った。

その夜娘の家に眉目秀麗の若者が櫛を持って訪れた。

娘は大そうよろこび、両親も快く若者を家に入れ、

もてなした。一夜の宿が縁となって、若者と娘の間に恋が芽生え、毎夜のように会いに来るようになった。

併し、何是か若者のまなざしは冷たく漂う妖気のあることに気がついた。それに添ひ臥しの肌もいつも冷たかった。不審に思った娘は、ある夜意を決して、隠し持った剃刀で男の肌を傷つけたのである。驚いた若者は何も言わずに闇の中に逃げ去っていった。

娘はこの次第を両親に打ち明け、翌朝親子共々血

の跡を辿ってゆくと、こは如何に、雨滝の洩のそばで消えているではないか、さては噂に聞く洩の大蛇の化身であったのかと驚愕したが後のまつり、この時既に、娘は妊っていた。

日が経つにつれ大きくなる娘の腹を見て不安と焦燥に苛まれながら産月を待った。やがて月満ちて生まれたのは人間ではなく正しく蛇の子であった。而も次ぎ次ぎと七盃半も生まれたのでこの一家の驚きと困惑は如何ばかりか、思案の末、蛇の子を裏山の皿が森に追ひやってしまった。

このことを知って怒った雨滝の大蛇は黒雲を呼んで竜となって天に昇った。すると一天俄にかき曇り、雲は雨を呼び、竜の口は稲妻を吐き、号泣は雷となって天地に轟くばかりであった。豪雨は七日七夜続いて、皿が森に無気味な地鳴りが起こり、続いて蛇の逃げ込んだ皿ヶ森を根源として山津波がどろどろと山裾を襲った。人畜は逃げる暇もなく哀れにも生き埋めとなりさながら修羅の生き地獄のありさまであった。

山なす土砂は本谷川の流れを堰き止め、長田峠と結

んだダムとなり、川筋部落辺りまでが沼となった。

水位は次第に高まり遂に長田峠を越す程になり、この現状を見た松皮ひわだの人々はこの上は神仏に頼る外はないと、竜神様のご神札を立て、一心不乱に祈願した。

懸命の祈りが神に通じたか、堰の一角が崩れ、沼った水も本谷川へ流れはじめた。あれ程降り続いた雨も止み土砂も順次流れ去って里人は漸く安堵の胸を撫でおろした。

里人は竜神様の加護を固く信じ祠を建て、祀り、その功德を後世に伝えている。

又不幸にも崩壊の犠牲となった人々は懇ろに供養され七人御先みさきとして後世にまで伝えられている。

崩壊の大きさは幅三百メートル、高さ一千メートルで当時四国一の規模と噂された。

昭和三十年頃本谷川の護岸工事の際昔生き埋になった人の骨や、瓶かめ、釜等の生活用品も数多く出たと言う。

名医橋本祐元先生を偲ぶ

松瀬川ませかわ旧桜三里に差しかかる吹上池ふきあげの上手かみてが赤坂峠あかさかその次が鳥越峠とりごえで、両峠の落ちくぼんだ鍋底地帯なべぞこが鈍子池どんこと呼ばれ、その上層地帯を含めて「鳥の子とりこ」という区名になっている。

江戸末期の頃、この集落に橋本祐元（家号を高原）という近郷きつての名医が住んでおられた。

高原家は遠く正徳（約二七〇年前）の昔より代々医を業として明治に及んだ家柄であって当代に至って益々技に冴さえ、仁を以て施す医療は世の信頼と尊敬を受けていた。

この時代の医業は別に医師の養成機関や免許開業の規則があるわけではなく、ただ父祖伝来の家業として見よう見真似みまねで、習い覚えた知識で診察、治療し、漢方による生薬せいやくの煎じ薬せんじやくを与える程度であった。したがってその報酬も決まった定めもなく、その家の分に応じ

た支払いでこと足りていたのである。

しかし、社会的には医者しよぐうの処遇は比較的高く評価されていて、苗字帯刀みょうじたいとう（苗字をつけ刀を差すこと）総髪そうはつ（髪をのばしうしろを束ねること）に紋付羽織もんつきはおりの着用を許されていた。

またたとえ、お殿さまのお駕籠かごの前を横切っても何らお構いなしの特権も与えられていた。

この鈍子池には東西に走る金毘羅街道こんびらかいどうが通り抜けていたが、南北に通ずる道がなく不便だったので別にお医者道の特設されていた。遠くはお駕籠で往診に出かけ、時には馬の背たよに頼ることもあったという。

今もなおそのお医者道は残っているものの、現在では人通りもなく荒れ果て通行が出来ない状態になっている。急患でいざお呼びの節は、今ならお抱え運転手つきの自家用車にあたる、近所の屈強な若者を駕籠かきに雇った。また若者も小遣錢稼かせぎになるので喜んでこれにに応じていた。

先生の名声は遠く小松藩、西條藩内にも聞こえていたとみえ、ある年六十キロ（十五里）も離れている新

居郡と宇摩郡の境にある関の戸の大庄屋から往診を頼む使者が来た。早速迎えの使者、駕籠かき四人、薬箱持ち七人の一行で出かけた。もちろん泊りがけの往診である。

大庄屋の家で無事診察を済ませたが、その間、人夫箱持ち達は酒、肴さかなの接待を受けるといいういかにも悠長ゆうちやうな時代であった。



橋本家の墓

例によりお礼として七つのお包みが出された。この時代は、薬価とか往診料とかお車代等とは言わないで、すべて「薬礼」と言ってお家の家柄、財産に依じた謝礼であった。

一杯お召なされた先生はここで一寸考えた。自分はいくらでもよいが、もしも人夫の分が少ないと彼等が可愛そうだと、そつと中を覗いてみると案の定思ったより額が少ない。そこで、持った扇子で庄屋の頭をポンと一つ軽く叩いた。庄屋もさる者、以心伝心この間の事情をよく察し、早速包みなおして差し出した。一つでいくら、二つで何ぼと講談もどきで語る実話を、現代の古老が、子供の頃聞かされたと真面目に話してくれた。

先生は内科外科は言うに及ばず、特に産婦人科にも通じ、この近辺をはじめ松山城下までも、たびたび往診に出かけて人命を救っていたが、惜しいかな、明治十五年、五十九歳の働き盛りで逝去された。

雲昇院篤雅祐元居士

お菊、秀光の悲恋物語

この物語は封建社会から明治の文明開化への夜明前、

安政年間（一八五四〜一八六〇）の出来ごとで、丁度そのころ土佐国五台山竹林寺の脇僧純信が、山の麓にある、いかげ屋、の娘お馬に恋慕し、女犯の罪で国外に逃避した年代で、約百三十年前にさかのぼる。

松瀬川村の娘達五、六人が月の一日と十五日の二回檀家寺、北斗山上福寺へお茶、お花の花嫁修行に通っていた。その中に「お菊」と呼ばれる娘がいた。松瀬川小町と噂されるだけあって瓜實顔の色白で、容姿だけでなく、氣立ても優しく才知にも長けていた。當時は十六歳ぐらいで縁付くのが普通であったから、相当の家庭に育ち美貌の彼女だけに、数々の縁談もあつたに違いない。

その頃寺に「秀光」と名乗る脇僧が仏道を修めていた。眉目秀麗で法衣が良く似合い、口さがない娘たち噂にのぼり、熱い視線を向けられていた。

村娘と修行僧、遠くて近いは男女の仲と平凡なセリフだが、いつしか二人は人目を忍ぶ間柄になっていた。仏教の戒律は厳しく、特に真言密教では十善戒の一つに数え、女犯は、弘法大師も深く戒めているところ

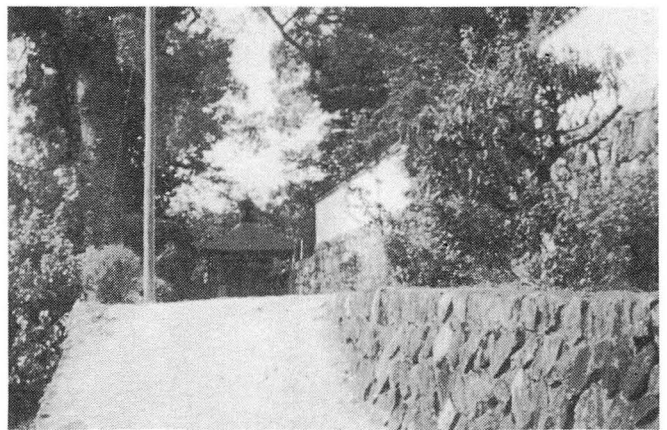
である。

お菊と秀光の噂は狭い村中に広った。

戒律を破った仏罪と村人の冷たい視線を受けてはこの寺に長くはおれない。だからといって離別はなおつらい。思案余った二人は来世に幸福を求めて自らの命を絶つことにした。

しめし合わせた二人は、揃いの白無垢姿で仏間に身を整え、更に湯飲茶碗に水を入れ膝前に置き、男は腹を、女は胸を突き、この世の様とは思えない凄惨な場面が演じられた。二人は余りの苦しさに目前にある湯飲みの水を覆し飲むことが出来ず、七転八倒苦しみながらも互いに相離れまいと手と手を固く握り合っていた。

この騒ぎを寺男の松吉が見つけて「和尚さん大変じゃ、大事じゃ、秀光さんとお菊さんが仏間で死んでいゝる。」と注進に及べば、和尚さんも驚くまいことか。転げながら駆け込んで、よくよく見れば二人はすでに虫の息、「早く医者を呼べ」とぼんやり立つ松吉を走らせた。半時ほど(一時間)で高原医者が来て「水を飲



山北斗宗言真 参道福上

んでいないから二人共助かるぞ。」と手慣れた手つきで介抱した。秀光は座敷に寝かせ、お菊は納屋に移し別々に養生した。秀光のところでは「お菊さんは元気になった安心せよ」とお菊さんには「秀光さんも助かった、大丈夫だ」と双方を励まし危機を脱し、そして二、三か月後に二人とも元の体に回復した。

さて後始末が大変だ。寺で僧侶が不浄女犯をし、更に刃物三味の心中沙汰とは仏の教えに反し檀家の聞こえも悪い。この上は寺に置けない、俗家に戻すことも叶わず、遂に二人を呼び、「お前等は再びこの地を踏むな」と因果を含めて四国八十八ヶ所巡りの遍路姿を

見送った。

その頃の四国巡拝は全行程三百六十余里、歩いて五十五日、もし各戸の門口かどぐちに立ってお経を唱え、いくばくかのお接待に頼る回り方をする場合は何日かかるか分からない。どこで行き倒れになっても不思議でない。

送り出せばそれが最後で、帰りつくまでに音信もなく全くの死出の旅であった。そのため遍路姿は死装束しにそうぞくで水盃みづさきの上、泣きの涙で送り出したものである。

この話には後日物語がある。それから幾歳月、人の噂も消えた頃、松瀬川まつせがわの人が四国巡拝に出かけ、土佐の札所を回り、傍かたわらの茶店で一服のお茶を乞うた。

そのとき出て来た茶店の女主人と世間話をする内に、度々伊予なまりが出てくるので、「あなたの生まれはどこか」と尋ねると「私の生まれは松山在所、松瀬川村の生まれ、娘の頃までそこで育ったが、故あって今はこちらの生まれがない稼業かぎようをしています。」と答えた。

それはあるいはお菊の又またの姿であったかも知れないということである。

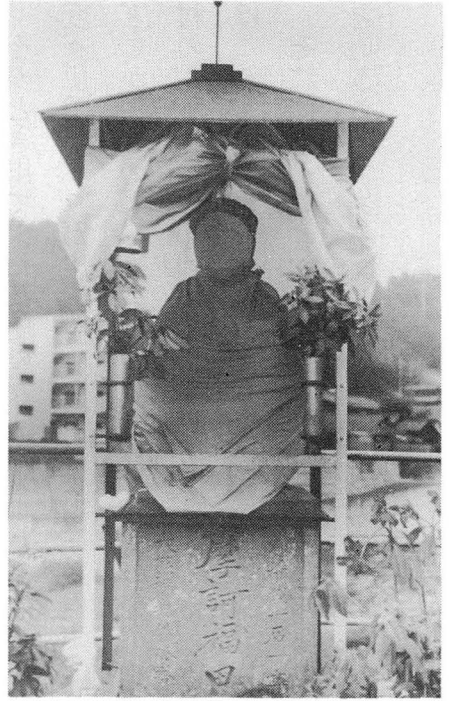
西谷

法界門橋の地蔵の由来

法界門橋は以前は、大熊橋と言っておりました。その東に門があつて、この門は当時の安国寺が保免ほうめんにあつた時の門です。その跡地は現在も残っております。

このお寺の門が法界門と呼ばれる様になつたのは、「法界山伏」を供養する様になつた時からであります。昔安国寺には、「法界」という山伏がおりました。ところが山伏が夜出て来て、婦女子に暴行を加えたり、金品を盗ったりしました。それが一度でなく度々であるので土地の人々が困っておりました。

それで檀徒の一同がよい方法はないかと、度々集まって相談をしておりました。ところがこの山伏が誰かに殺されたその年の夏以来悪病が流行したり、また突発的な事故や、色々な災害が続きました。これは大変だ。原因は何であるのかと、里人も色々と考え出



法界門橋とお地蔵さん

しました。

それで寺惣代や檀徒が集合して、一同の意見を聞いたところが、これは山伏を殺した、たゞりであるという話に話はまとまりました。

それでお地蔵さんを作って、御祈念を致しましたところが、災害もいつとはなしにおさまって平和な生活が出来る様になりました。

そこでこの山伏の霊を弔うためにこの門を法界門と名付け、また、橋の名も法界門橋と呼ぶ様になったということでもあります。

その後、保免の安国寺は火災に逢って、現在の場所

へ再建したといわれます。保免の山門は現在の場所へ建て替えられて、昔の名残を留めております。

お塚田のはなし

今からもう四、五百年も前のこっちゃんやそうな。川東の城藪は昔、小手ヶ滝ちゅうて、戒能軍のこんまいお城があつたんじやと。そこい、山の向こうの久万から敵が攻めて来たんじや。敵は大野ちゅう大将の軍じゃつたが、城藪に立てこもつとる、戒能軍の家来には強いのが多いちゅうことをよう知つとつたけん。いっぺんには攻めてこずに、城を取り巻いとつて、その上奥の山から城い引いとつた水を切り落としてしても城を水なしにしてしもた。

戒能の大将は困って水がのうてはまもたけん。のどがかわいても水も茶も飲めん、そこでしゃなし、夜こっそりと城におつた家来や女子供らを逃がすことにした。

惣田谷の上の大熊山にある出城に逃げこんで、もう

いっぺん戦争をやろうと思ったんじゃけど、城を逃げ出すんは大ごとじゃ。ちゅうのは、夜でなきあいかんけん、路もわかりぬくいし、敵の目も盗んで逃げにゃいかんけん、明りも持てん、北間きたはまから山越えするもん、庄屋元から川を渡って、大元へ行くもんと、なんぼものかたまりに分かれて、大熊さんの城い逃げこんだんじゃのう。

いよいよ大熊に立てこもって戦いを始めたんじゃが、こゝで又、新しい敵がふえた。ちゅうのは、東の周桑しゅうそうの方から黒川ちゅう大將が、大野軍の助太刀すけだちとなつて攻めて来た。戒能軍は城の東谷側と、西谷側の両方から挟撃はさみうちにおうてしもたんじゃ。ところが大熊城は高い岩の上じゃあし、水もあつたんで、攻めぬくうて守りよいえゝお城じゃったけん、えゝおりを狙ねらうた戒能の大將は、東の黒川軍と西の大野軍へ、次々と総攻撃をかけた。東の黒川軍は油断を突かれて総崩れそうくづになり、東谷の「さやのせ橋」の近くで討ち死にしてしもた。家来たちも命からがら、周桑へ逃げて帰ったちゅう。西谷側におつた大野軍も、勢いづいた戒能軍



現在のお塚田

が山の上からの総攻めに逢うて、ある者は上へ、ある者は下へしもとばらばらになつて逃げ出した。その時戒能軍の大將は家来の中から、弓の上手な者を十人あまり選だよりして、大根木おおねぎの金毘羅山へ先巡りして隠かくした。ほれ、あそこは東が井内川で、なるい所がちいとしかのうて、西は金毘羅山が競せり出しとる。ばらばらになつて逃げ出した。大野軍は頭の上から矢を射かけられて、死んだり、捕まったりしてしもた。この戦いは戒能軍の大勝利じゃつた。戦いのあとで戒能の家来や、ねき周りのお百姓さんが、討死した大野軍の死がいを集めて、土をかけ石を積んでお塚さんをこしらえ

たんじゃ。今でも大根木のかいまわりの下の田に、そ
のお塚さんが上に二つ、下に二つ、四つ残っとる。

ところで此のお塚さんじゃあが、田を作るのにま
がってどもならん。なんべんものけるか、寄せるかし
ようとしたんじゃが、その度に腹が痛たなったり、目
まいがしたりするんで、何時の間にかやら祟りがある
ちゆうて、誰も動かそうとせんようになったんじゃと。
明治三十五年頃、今の県道が出来る時も、此のお塚
さんの石を使こうた石工さんが腹が痛なつて、仕事が
でけんようになったちゆう話が残っとらいの。

お塚田を作りよる人が、紙でこさえたこんまい幟
をたてて、祀っていたのを見たが、今はどうぞやのう。

井内中野組の昔話

井内の中野組は、昔から戸数が十戸前後の小部落で
あった。部落の東方の山に「小手ヶ滝」の城跡があり、
城にまつわる昔話は数多く言い伝えられている。部落
の中央に通称お薬師様というお堂がある。正確な名は

「日光山、円満寺」と言う格式のある寺院であった。
この寺は小手ヶ滝の城主の菩提寺であったようである。
現在でも清酒一升を、戒能備前守末裔の戒能家より、
毎年井内組に送り届けられている。おそらく寺の管理
料ということであろう。

昔は寺の西側に美人の尼僧の住まいがあつて、寺を
守っていたという。本尊の薬師如来像は、京都の仏師
の作で、東向きの立派な立像である。願い事をよく叶
えてもらい、心願成就の日には、布製の幟に「心願成
就巳の歳の男」等と書いた幟をよく見受けたものであ
る。

この薬師如来像を京都より運搬したのは、白衛門、
黒衛門という兄弟であつたという。この二人の墓は薬
師堂の東方約三百米の、田の畔に並んで建っている。
京都よりの長い旅路の運搬役の大任は、ご苦労でした
と今に感謝されている。

毎年お薬師様のお通夜が九月十四日にあり、黄粉む
すびを作つて、大人も子供も総出でお通夜をする。境
内には経石や尼僧の石碑等が建っている。

小手ヶ滝城周辺の地名

小手ヶ滝城周辺に、まつわる色々な面白い呼名の地名が残っている。

- 一、城の首（城のあった近くの稜線を城の首と言う）
- 一、的場（昔射撃場であった所。現在は待つ場という屋号の家もある。）
- 一、陣の畝（直瀬峠の南西にある。）
- 一、古城戸（古城戸という家号もある。）

城にまつわる遺品には、城主戒能備前守の二男で義家公、国郷の位碑。験歡院殿城離大居士や、竹の彫刻入りの硯石すずりいしがありそれを保存している家がある。戒能備前守には三人の男子がいて、長男には松の彫刻、二男には竹の彫刻、三男には梅の彫刻入りの硯石を持たせていたというが、松や梅を持っていた家は、町外に出て川内町にはいない。

盆念仏の行事

毎年旧七月十五日には、中野組の戸主がお薬師様を会場にして、盆念仏をする。その最後に「野路のじの六左衛門様」「うねの仁平様」「谷の二平様」と地名と名前を呼んで「念仏を申し上げます」と先導役の古老の発声で、おもむろに念仏を唱えるのである。此の三名は旅路で斃たおれた無縁仏ではないかと思われる。部落の人々は丁重に取り扱って供養している。

善城寺にまつわる話

井内の石林山、善城寺の住職にて「宮内大教」という大僧都がいた。毎年正月の月に僧侶が部落おもむに赴き大般若の行事を行うのが通例とされていた。その席で大教師が、私の父は、「伊藤博文である。」と申された。大教師は子供の時、石手寺の仏門に入りて後、高野山の本山で修行中、天皇陛下の御召物おめしものを御祈禱ごきとうして、宮

中に奉参する行事があった。

高僧に随行したのが宮内少年であったという事である。宮中で文武高官のい並ぶ中で、ある高官が宮内少年を呼び、お前の父親様はあの伊藤博文公であるぞと教えて下さったということである。大僧都は人品高く、見るからに高僧の感がする人であったというが、井内の石林山善城寺の住職となって、父の伊藤姓を名のる事もなく、七十余歳で世を去ったのである。

戒名 大僧都大教古昭和二十二年三月二十一日

享年 七十六才没

久尾の乳地藏さん

牛乳やミルクのない時代に、嬰兒の滋養は総て母乳に頼っていた。その母乳の出ない母は近所の乳もみ婆さんに来てもらい、乳もみの手当てを受けていたが、多くの場合素人で効果があがらない。また黒鯛（チヌ）やだんご汁で母の栄養補給することは今も昔も変わらない。

途方にくれて（貫い乳）に走るが、それだけでは足りないので、餅米を粉にし軟らかく蒸して液状にうすめ、更に凝煎飴を混ぜ、紅の絹布に包み、乳豆にして乳児に吸わせていた。従って手数がかゝり、時には調整を誤り、乳児の好みに合わず吐き出したり、また授乳時が乱れていた。そのため栄養失調、消化不良の症状が起きてくる。

したがって血色が悪くなり、痩せ細って、空腹のため、乳を求めて夜泣きする例も多かった。いわゆるカンの虫と言って最も恐れていた。

今はミルクのお陰で良く眠り、よく育つから昔の苦労は若い母親には想像もつくまい。昔の母親は昼間の労働に疲れ、睡眠不足と、吾が子不憐さや、あせりで、母子諸共泣いて夜を明かすことも度々であった。

乳児から火が付いたように泣きせがまれ、周囲からは立つ瀬がない。何とか自分に乳が授かりますようにと神仏にすがりたくなるのも無理もない話である。

こうした藁をも掴みたい心境の折柄、西谷久尾（塩



瘤根のある大銀杏

が森の麓)にある

「乳地藏さん」と

も「子育て地藏さ

ん」とも呼ばれる、

霊験あらたかなお

地藏さんがあると

噂に聞けば、若

い母親は堪らない。

早速お参りして

仏徳に預かりたい

と各地より参詣人

が相継いだ。松山、

三津浜、伊予市方面からも尋ねて来たという。中には
姑しゅうとめさんが、嫁なやが悩なやんでいるのを見かねて代参だいさんする
という光景こうけいも見かけた。

バス停、西谷口から二キロメートルは比較的平坦で
あるが、西谷小学校からの二キロは俗ぞくに「八町坂やまか」と
いう急な坂で、所によっては石ころが多く、何回も休
憩きしないと登れない。それでも乳もらいたさの女の一

念であった。

ようやく登りつめた竹林の中に、余り広くはないが、
古びたお堂があつて、中央の仏壇ぶつだんにお地藏さんがお祀まつ
りしてある。噂に似合わない粗末な仏像だが、誰だれが供
えたか、数々のお供物が飾つてあつて、願ねがいごとの跡
がしのばれる。

傍かたわらに古い銀杏の大樹があつて、お堂の屋根まで
覆おいかぶさり、昼ひるなを暗い。各枝にたくさん、大き
な瘤こぶが付いている。この瘤根りゅうこんが、ちょうど乳房ちゅうぶさに
ているのでこの瘤根を削りとり、煎せんじて服用すれば、
やがて待望たいぼうの乳に恵まれるという信仰であつた。
事じ実じつ、銀杏ぎんなんの薬効は第一に乳がよく出るし、頻尿ひんりょう
を止め婦人病を治し、鎮咳ちんがいにも効くという。

北方

齊藤別当実盛の碑

北方きたがたなん旦うえノ上に禅宗龍雲山大興寺がある。この寺から

西南へ二〇〇メートル程下りた所に「おちごさん」と呼ばれている場所がある。

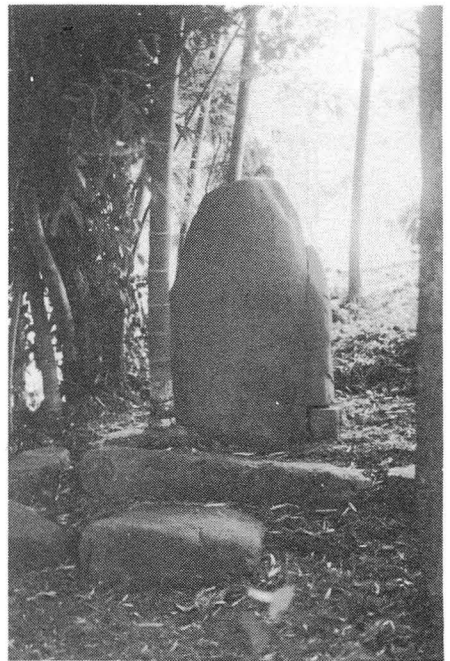
この地と並んだ竹藪の中に、斉藤別当実盛の碑が建っている。真下に道前道後の水路が通り、面河の水がゴウゴウと音高く流れている。

碑の土台は四角形の石組みで囲い、二段重ねの上に大きな自然石で西向きに建てられていて、傍らに何抱えもある大きな榊の木が聳え立っている。

史談によると斉藤実盛は寿永三年、平維盛に従い、源義仲を討つため、加賀国篠原の合戦で敵将手塚太郎光憲と戦い、戦鬪中、稲の株に足を取られ倒れたところを討たれたという。出陣に当たり白髪を黒髪に染め、錦の直垂を着て、若者と対等に奮戦したことは有名な物語。それから稲の病虫害予防、豊作をねがう神として全国各地に祀られている。

北方且ノ上にも実盛さんの伝説が残っている。

今から八〇〇年前一一八五年三月二十四日壇の浦で平家は滅亡し、その折り実盛一族は南予の海岸に上陸、今の保内町を通り過ぎ、敵の目をのがれながらようやく



斉藤実盛（左郷の守）の碑
且ノ上 おちごさん 竹藪の中

くこの地北方且ノ上まで落ちのびて来た。ホツとする間も無く源氏の執拗な平家追討の軍兵に囲まれる。

止むなく大興寺を出て源氏の兵を迎へ討つ大合戦となった。いまの実盛の墓の真北にある高台から弓を射たといわれユーブ（弓場）の地名が残っている。実盛は稲穂に足をとられ、身の自由がきかず、ついに力つきておしくも討死にする。平家の落武者の最後を憐れみここに墓を建て代々の住職、村人と共に回向して来た。

昭和に入り太平洋戦争終戦まで続けられていたが大興寺も無住となりて止んでしまった。

かつては、八月の盂蘭盆には百八燈を立てて組中で

念仏講を開き回向した。子供等には各家より持ち寄った赤飯や黄粉むすびを配り、又子供相撲も取らせて相賑わっていた。

また、毎年、夏の土用の三日目には虫祈禱を碑の前で行った。ここから虫払いの笹をかついで、鐘や太鼓に送られ、西の重信川の河原へ流しに行った。「ナンマイダー、イネの虫が目をむいだ」と子供達が拍子をつけて叫ぶ声が稲田の上を風に乗って流れた。

雨乞行事も碑前で行われた。昭和九年の大旱魃の時であった。雨乞神事の最中に一天にわかにかき雲りザアザアと大粒の雨が降って来た。皆の衆は大喜びで霊験あらたかな実盛さんに感謝した。その雨がこのあたりだけに降ったことを後で知り一層驚いた。今も語り草として残っている。

しかし、これを詳しく語り継ぐ古老も少なくなり、今度の郷土史昔話の編集調査で初めて実盛さんの碑を知った人も多かった。

此の機会に実盛さんの供養を再現しようと組中の意見がまとまり、土用入りの三日目を期して虫祈禱を

行った。当日は下林の大安寺和尚を招き懇ろに読経、追善回向された。

自性庵と淡島大明神

北方西部公民館の筋向かいに自性庵がある。戦国
昔、土佐の長曾我部元親が四国平定のため来襲すると
いうわさが広がった。住民たちは兵火の難を逃れるた
め、北方大興寺の禪師と、時の庄屋代理である曾根氏
に相談を持ちかけた。二人は協議して、この上は仏の
ご加護に頼るより他に道はないと、禪師自らが山之内
福見寺に安置せられていた准胝観音をひとまず奉持
し帰った。その後、曾根氏が建立した自性庵に安置し
替えたと伝えられる。

准胝観音さまは、六観音の一つとして高邁な智徳を
具なえ、延命長寿の功徳を以て知られ、厚く信仰され
ていた。その後、明和七年、時の住職比丘（出家した
男子）小林知成師が厨子を新調して、その際地藏菩薩

一体と併せて奉納したとのことである。

准胝観音は一般に数少ない尊像で、三目十八臂

(お目が三つ腕が両手で十八) ある。

よく千手観音と間違えられる。十八臂には、それぞれ衆生を救うための道具や教典を持っておられる。

准胝とは清浄という意味で、准胝観音といえれば心の清らかな優しいお観音様と解し一般に女の仏様と尊び親しまれている。

なお、このご本尊と並んで淡島大明神が祀られ、女人の信仰を受けている。この淡島さまは北方宝泉の某女が婦人病のため、和歌山県和歌の浦の淡島神社へ行かれ、お籠りしたところ霊験があったので、ご神札を奉持して帰り自性庵にお祀りせられた由緒がある。この方は藪之内の月峯専満首座で生涯を当庵で過ごされた。

境内は余り広くはないが、川内三十三観音の第二十一番菩提山穴太寺として聖観音が祀られている。また北方村庄屋代理の曾根氏と、庄屋重松氏の墓所として五輪の塔や古い歴代の墓が並んでいる。

この庵の四ツ柱門は明治の中頃、北方小坂の民家の



北方西中村 自性庵の本尊

門を移築したもので冠門と呼ばれた。その後度々屋根の改修が行われ今日に至る。

因みに、従来の古い庵は先年火災にあったが、ご本尊は無事に持ち出され難をのがれた。新しい社殿も建立され今日に至っている。

久万山騷動奇談

明治四年、新政府は廃藩置県の大英断を敢行して、

今までの殿様は華族に列し、多くは新東京に移住した。

わが松山藩も例外ではない。

新旧思想の揺れる時代で、交通不便で新知識のおくられた久万山地方の農民は、今まで続いた殿様でも年貢がきついのに、何処から来るか知れない新知事はモット非道いに違いないと行く先を案じて、藩主の留任と徴兵制度の自由化を求めて百姓一揆を起こした。世に言う久万山騒動である。

約五百人程度の農民が二派に分かれ、一隊は三坂峠を越え久米八幡神社前へ、また他の隊は、井内峠を下って川上を経て一応久米で合流し、松山城下に向かう手順だった。その井内峠を越す一隊はまず、井内村庄屋、戒能寿次郎邸を襲い、重要書類を強奪するために雪崩込もうとした。

ちょうどその頃、戒能家の下僕が山で仕事をしていてたが。急を知って近道を駆け下り、注進に及んだので事なきを得た。久米で合流した農民は、藩兵のためにひとまず川上まで押し返され、世の変遷と新政府の方針を詳しく説明を受け、納得し解散帰郷した。

この騒動の最中に。川上北方村の田中藤作（当時三

十一歳）は、農民一揆の煽動に乗り、彼等と共に放火、強奪に加わった。当時水田村に租税出張所があったが、ここにも放火した。藤作は根は律義者で、酒の勢いを借らねば何事も出来ないらしく皆の者にしたたか飲まされ、前後の見境もなく群衆心理で乱行したものと思われる。騒動も鎮まり、特別な暴力指導者や、直接放火に加わった者は呼び出されて、それぞれ処刑されたが、藤作もその中であつた。

翌五年十一月二十日、藤作は藤原の徒刑場で絞首刑を執行された。

家族は涙ながらに遺骸を貰い受けた。当時は丸い座棺だったが、これに納め、近隣縁者が担いで連れもどるその途中の出来事である。

その頃は石手川を樽味で渡り、今の畑寺を通過して久米に出るのが本道であつて、畑寺の百間土手の辺りで棺の中からウンウンと唸り声がある。何事ならんと恐る恐る蓋を開けてみると、藤作が目を開けて息をふきかえしているではないか、一同は真昼中に幽霊が出たと魂消た。驚きと喜びに、取り敢えず水を与えて一息



まいと言う情理に意見が分かれたが、結局事の次第を庄屋を通じて羅卒屯所へ、更に県の聴訟課へ指示を伺った。

困ったのは県側で、古今未曾有のことで何とも指示の方法がない。県もやむを得ず東京の司法省に伺いを立てたが、司法省においても、前例のない珍事とあって、最高審議官庁である太政官正院という所にもって

つかせ、一行はやがて自宅の敷居を跨いだ。さてそれからが大変。死罪の者がたとえ仏の慈悲で生きかえったとしても、罪は

罪、再び出頭せねばならないと言う者と、折角生きかえったのだから申し出ることはある

行ったところ、太政官では「藤作は法に定めたところによって刑を執行したのだから、蘇生したからといって二度と罰することはない」と藤作の無罪と原籍編入を県に指示した。つまり、第一の藤作は罪の執行で死罪を受け死去、第二の藤作は蘇生した日を以て誕生したわけだ。

事件は解決したものの、後始末がまだ残っている。刑の執行に手落ちがあったのではないかと、執行官三人の責任問題である。三人は自らの不手際を反省し、行政処分ふてぎわの審議する先に進退伺いを提出したことによって、再びお咎めのお沙汰がなく、円満裡まことに終わった。その後藤作は平凡ながら天寿を全うし六十歳まで生きたが、戸籍面ではまだまだ若々しい三十歳あまりであったというウソのようなホントの話である。

おさん狸たぬき

旦那上のおさん狸はあちらこちらで人を騙しては喜んでいた。この狸は子供が大好きで子供が遊んでいる

と、すぐ側へやって来てうろちよろしていた。

子供が木に登れば同じように木に登り、ある時には子供に小便をかけられ狸は怒って子供に祟り、子供は大熱を出して寝込んでしまう。その原因がわからず親は心配した。その翌朝、家の戸口に川魚や木の葉がいっぱい盛り上げてあったそう。狸がお詫のつもりでしたことだったのだから。

夏ともなれば子供達が近くにある十王堂仏像を抱いて下の川に飛び込み、馬乗りになったり浮きにしたりし夢中で遊びまわっていた。すると何時の間にか狸も子供にまぎれこみ一緒に遊んでいた。これを見たある人が見かねて諫め、仏像をお堂に元どおり安置した。

ところがその夜、男は腹痛やら大熱で七転八倒の苦しきで死ぬほどの思いだった。そこで枕辺におさん狸が現れ、「わしが子供と折角面白く遊んでいたのにいらんことして」と怒ったという。

この狸はずっと前からとりあげ婆さん（産婆）とも大の仲よしで、お産の晩にはたびたび、のこのことついで行ったものであった。すると妙にお産が軽いので、

婆さんは助かり喜んだ。

とり上げ婆さんが「今度のお産はちと難しいぞ、狸さん手伝っておくれ」とたのむと狸は喜んでついできた。すると重いお産が軽くすんだ。

それからおさん狸と呼ばれるようになった。

お礼の赤飯や餅等を狸の住家である穴の入口に置いておくと翌朝は無くなっていたという。

枕がえしの石

医王寺の十七夜行列の出発点であった旦ノ上の観音堂の傍らに一抱え程の石があった。それが枕がえしの石と呼ばれていた。

昔、旦ノ上の「宇吉さん」が横河原で酒を飲み、ほろ酔い機嫌でこの石のところまで帰ると、急に眠気に



おそわれ、石を枕にごろんと寝込んでしまった。酒のせいで朝までぐっすり寝て、目を覚ましてみて驚いた。

昨晩たしかに東枕に寝たはずだが西枕になっているではないか。そこは道が狭く、小さい川が流れていて寝返りもままならぬ場所だったのに、西枕になっているとは不思議だ。どうも解げせない。と、首をふりふり

すっかり明るくなった道を宇吉さんは我が家へ急いだ。

我慢な宇吉さんは、翌晩もわざわざこれを確かめるため寝に行った。するとやっぱり東枕が西枕になっていた。

そこではじめて隣人に話したら、「そんなてんごなことあってたまるか。わしが寝てみよう」と物好きな隣人が出かけた。東枕に寝たがやっぱり西枕になっている。それからは人の口から口へと噂うわさになり、遠方からもたしかめに来たが評判通りなので、それからこの石を枕がえしの石と呼ぶようになった。

最近までその石があったが、学校線（川上小学校西から山之内に通ずる道）の道路が拡張された折りに行方不明となった。

南方

曲里の金毘羅権現と霊石

別に鳥瞰ちようかん図を見るまでもなく、北方、松瀬川は扇型に広がる高台だか、要部かなめに当たる曲里、吉久は緩やかに傾斜しつつ狭まる低地になっている。そのため雨期や台風時には溢あふれた悪水が全部曲里、吉久に集まり大きな被害を残して表川に抜ける。

いざ出水ともなればたとえ夜中であっても蓑笠みのかさを着け鍬を担いで水害防止の応急工事に出動せねばならない。それが毎年の繰り返しとなると宿命とは言いながら叶かなわない。堪たまりかねて排水路の復旧、護岸工事の共同作業に懸命けんめいになる。その工事中に出た小石が各所に積み重ねられ山をなし、それを石塚又は石盛塚と呼んでいて、今もその一部が残っており、また、長塚、相の川、岸の下のホノギ（小字こあざ）も残っている。

しかし悪いばかりではなく良い面もあって、山之内



曲里の金毘羅権現と靈石

ある。それが南山の開墾で、果樹栽培に現れ、南方西部の活発な公民館活動に象徴されている。老人クラブの全国表彰もその一つである。

曲里区の中央点、石盛塚の北の端に、金毘羅大権現がお祀りしてある。由緒は分からないが、相当古くから住民安住の願いをこめてお祀りしているに違いない。御神体に「先御形百年余二再御神体、嘉永六年吉作之作者徳右衛門朱線」と刻まれている。今から逆算すれば百三十年昔になる。

より吹く風は涼しく、稲作の害虫も少なく、土壌は砂地でお米はとても美味しい。何にもまして有難いことは、永年培われ、た勤労精神の旺盛さと、共同意識の強固さはみごとで

明治の初め、神仏分離令の際、則之内三島神社に合祀されていたものを、曲里区氏子の強い請願により現地に復帰再建され、毎年三月と十月の各十日を縁日と定め、組中集まり、盛大な祭典と酒盛りで親睦を計る事を例としている。この神域に鉄の輪をかけた直径五十センチ重さ七十キロ位の、珍しい伝説を持った石がある。一見何の変哲（変わったところ）もないただの石で、路傍の石として何等顧みられないものが、この聖域に鎮座して、いつも新しい主連飾りが張られ、土地の人からは靈石と尊ばれマスコットとして親しまれている。この石にまつわる伝説がある。

昔この地に「大前氏」と呼ぶ豪農があつて、所有する田畑は広く遠く霞のかかる彼方まで広がる程で、したがって倉も幾棟も立並び、作男や女中も大勢雇い、人も羨む暮らしであった。ところが、この家の旦那様は大変な釣り道楽で、朝な夕な暇さえあれば釣りに出かけ、三度の食事も妻子も忘れるという熱中ぶりであった。

ある日、作男に弁当や竿を持たせ、めったに行った

こともない表川の下流に出た。その頃は水量も多く、各所に洩や沼があつて魚も大きく種類も多かった。清流に糸を垂らしてその動きに心を奪われていたが、ふと前方の一つの石が目にとまり、それが恰も呼ぶが如く、招くが如く、心惹かれるので、作男に持ち帰らせ、庭の雪見燈籠の近くに据えた。その夜は旦那様も石も満足して寝付いたかのようだったが、夜中にどこからか赤子の泣き声があるので目を覚ました。そして、自らの耳を疑い、また眠りかけるとまた聞こえてくるので、今度は耳を研ぎ澄まし、泣き声に引かれるように捜して行くと、何とそれが昼間河原より拾って帰った石ではないか。

旦那様は腰が抜けんばかりに驚き、その場に座り込んだが漸くして平常に戻った。そんな事が毎晩続き、しかも泣き声は次第に大きく悲しげに響くので、流石の旦那様も、何かの靈魂が籠っているに違いないと察し、この石を丁重に扱い、大法要を祈願して、金毘羅大権現のお傍近くに納めお祀りする様になったと語り継がれている。

この権現様前の道は南予方面からの金毘羅街道として人通りも多く、参詣人はこの石を「道しるべ」として受け止め、旅人は旅の安全を祈る道祖神と崇めた。時代は移った今も氏神さんの神石とし、また氏子の守り石として親しみ仰がれている。

堂の元の由来

昔、中山の唐川（伊予郡）というところに佐平という若者がいた。ある年の暮れ、隣の村から「チカ」というそれは氣立ての優しい嫁をもらい、楽しい新婚生活が数か月続いた。

ある晩のこと、佐平はチカに「お前には嫁に来てから何一つ楽しい事もしてやれず、毎日野良仕事だけをさせて可愛想じゃ、親父やおふくろの許しが出れば、わしもまだ一度も行ったこともない讃岐の金毘羅様へお参りに連れて行ってやろう」と言った。チカは夢かとはばかり喜んだ。

両親の許しを得て数日後、旅支度を調え愛し合う二人は手に手を取って金毘羅参りの旅に出た。

砥部を通り高井の村を抜けて見奈良へ、そうして川上村八幡の部落に入った頃には日はとっぷりと暮れていた。金毘羅参り本街道は今の十一号線沿いにあるが、佐平夫婦は少しでも先を急ぐため、裏街道を選び横河原の宿場をよけ、次の宿場川上へと足を早めた。軒深い草屋の農家の数軒を通り抜け、小川伝いの街道を古い榎の下にさしかかった。

その時、二人の前に黒装束の男がすっと立ちふさがった。佐平はとっさに盗賊とみてとり、チカの身を案じその男の前におどり出た。もみ合うこと数刻その間にチカは、明かりの見える方向へ懸命に逃げ、走り込んだところが常念寺という寺である。事情を話し、すぐさま住職と共に現場にとって返して見ると、すでに盗賊の姿はなく、佐平は川の中で深手を負って苦しいうめき声を上げていた。寺に連れ帰り必死の看病をしたが、その甲斐もなく、翌日夜の白々と明ける頃佐平は恋女房を残して息を引き取った。チカは氣も狂わ

んばかりに嘆き悲しんだ。そうして住職の計らいにより、付人をつけチカを唐川へ送り返したという。

それから数か月後、風の便りにチカは身重のままなげき悲しみ、とうとうこの世を去ったという。土地の人々は我が事のように気の毒じゃ可愛想じゃと若夫婦の末路をなげいた。

明けて翌年、桜の花が散りそろそろ麦の穂が色付きはじめるところ、あの榎の下で馬が足を折ったとか、牛が怪我をしたとか、また、ある人は若い女のすすり泣く声を聞いたとか、そうした不吉な出来事が数年続いた。

土地の人は誰いうとなく、佐平夫



現在の常念寺

婦の霊の仕業しわざではないか。そんなうわさが流れた。

人々はなんとかしようと、常念寺の住職を中心にその土地にお堂を建て、夫婦の霊を慰めた。ところがそれからというものは不吉なこともぶつとりと消え、村人はその地を堂の元と呼ぶようになったという。それから村人達は、毎年麦の穂が色付く頃には、堂の元で小屋をかけ、村芝居をしたり、ある時はデコ芝居や浄瑠璃を行ったり、佐平夫婦の霊を慰める行事を土地の年中行事として明治の末ころまで続けていたという。

しかし時代と共にその行事もいつしかうすれ、また昔の堂の元の姿も今はなく、ただ昔そのままの小川の流れが長い歴史を語りかけるかの様にかすかな音を立てて流れている。一方常念寺も姿は一変し、八幡の墓地「ドンダ」の中程に墓参りのお堂として昔の名残をとどめている。

米研狸こめとぎだぬきの正体

昔、竹之鼻に大変しつかり者の婆ばあさんがいました。ある晩のこと、ぼた餅もちをたくさん作ったので、仲良しの川向こうの婆さんに届けてあげようと思いたち「ひ



いふう」と数えながら重箱に一杯詰めこみ、急いで出かけました。お稲荷さんのほとりの宝泉川の土橋を渡ろうとした時、向こうの方から、「シャリ、シャリ、シャリ、シャリ。」と妙な音が聞こえてきました。

「さては噂に聞く米研狸だな。この婆さんを見くびって貰っては困るぞ。」と身構えました。

米研狸とは、夜おそく宝泉川へ出てきて米を研ぎ、その音で道ゆく人や夜学少年たちを怖がらせている狸のことです。

「シャリ、シャリ、シャリ、シャリ。」

立ち止まって音を確かめようとするとぴったり止み、歩き出すとまた研ぎ音がするのですが、まだ誰も狸の正体を見た人はありませんでした。

婆さんはだんだん近づいて来る音に耳を澄ませました。ちょうど闇夜でしたが、今晚こそは狸の正体を見届けてやろう。と、おおどに構えました。持っていたぼたもちを狸にとられないようしっかりと抱き、両手で固く押さえていました。音はすぐそこまで近づいてきました。

そこに婆さんが見た音の正体は何だったでしょう。長い竹の束をかついでやってくる一人の男でした。竹の束は長くて重いので、男が歩く拍子に曲り、先の方が地面を擦って、「シャリ、シャリ」と全く米を研ぐ音と同じだったのです。

婆さんは少しばかりがっかりして「なあんだ。」と呟きました。が、正直言ってほっとしました。竹をかついだ男も行き過ぎ、その音も南昌寺の方へと消えてゆきました。

やがて婆さんは、事もなく川向こうの家へ着き、「今頃の若い者は、腰ぬけで困ったもんだ。噂の米研狸も、正体をつきとめれば何のこたなかつたわい。」と、さきほどの事を話しながら持ってきた風呂敷包みをほどきました。重箱のふたとった途端、婆さんはびっくり仰天、大きな口を明けたままものも言えなくなってしまうました。

それもそのはず、確かに入れてあったぼたもちは一つもなく、代わりに木の葉が一杯つまっていたということです。

昔の狸のわるさはこの程度のものでした。が、昭和六十年代の狸はどうでしょう。人間様の電話を利用したりなどして、言葉巧みに年寄りの虎の子の銭を巻きあげ、金の延べ棒を紙切れ一枚に替える程巧者になってきました。

何時の時代になっても、たぬきばなしは尽きぬようです。

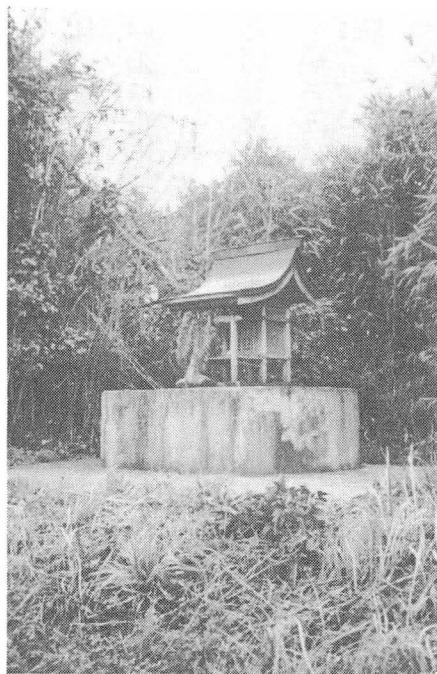
三本松のお染狸そめだぬき

昔、南方向かい川の里に大きな松の木が三本並んでいた。そこに住みついていたのがお染狸で、お茶目でなかなかのいたずら者だったという。お染狸が気に入りの住家としていた三本の大松の一本を、近所の男が伐り倒して自分の家の天井板にしたのに腹を立て、何とか仕返しをしてやろうと策を練っていた。

たまたま男が丹原方面へ牛を預けに行くことを知り、此の際に一つ脅かしてやろうと思いついた。そんなこ

ととはつゆ知らぬ男は、朝早くから家を出て無事に牛を預けすぐ引き返した。しかし、帰り道の桜三里は早くも夕暮れが迫っていた。小走りに道を急いでいる時に、谷道の真中にきれいな風呂敷包みが落ちていた。男は何気なく拾い上げようとしたが、「待てよ、どうも胡散臭い。」と思い、思い切り包みを蹴りとばした。すると風呂敷包みは、「キャン、キャン」と鳴いて忽ち狸の正体を現し、歯朶原深く逃げ込んだ。

そのままでは狸は腹が治まらず、今度は御高祖頭布に顔を包んだ美しい女に化けて、先回りして男を待ち受けた。「一人旅で夜の道は寂しいから連れになって



向い川の三本松お染狸の祠

下さいな。」と頼んだ。男は心細く思っていた所だったので喜んで一緒に歩きだした。しばらくゆくと途中に水溜りたまりがあつたので、男はちょっと手を貸して女を渡してやった。

その時、女の腕首が気味の悪い程まん丸で、おまけに毛むくじやらなので冷やっとした。女は狸の正体を見破られたと悟ったか、何時の間にやら姿を消してしまった。

そのうち男は道に迷ってしまい、夜が明けて通りがかりの人に助け出された時には、着物はバリバリに裂け、体中ばら搔がきになって目も当てられぬ姿だったという。

男は向かい川の家に戻ってから、床下ゆかしたで三日三晩眠りこけていたそう。背をまるくして寝転んでいる様子さまは狸そっくりだったと、近所の人々の噂うわさになったそうである。

塩ヶ森の大蛇だいじや

塩ヶ森は、川内の郷さとを一望にできる山であり里人にとって、色々な思い出を育ててくれた懐かしい母なる山でもある。

昔、塩ヶ森へ草刈りに行った男が、顔を真っ青にして息せき切って走り戻ってきた。何事かと聞いても口もろくにきけない有様。よくよく聞くと大蛇がおったので命からがら逃げて帰ったのだという。

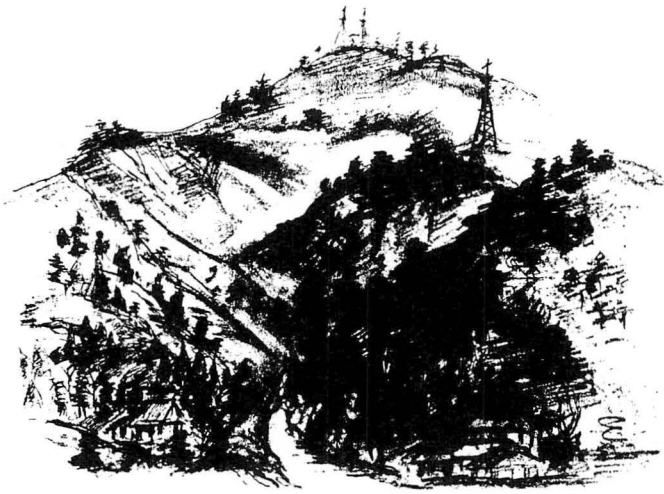
まんざらの嘘うそとも思えぬので、元気な若者が五、六人、その大蛇を見きわめようと、半信半疑ながら手に得物を持って、その男の案内で山に駆け登った。

現場へ着いた男共は、魂消たまげまいことか、それこそ斗とま柵すの麵めん棒ぼう位の胴体の大蛇がどぐろを巻いていた。生かしておいては今後の山仕事に差し障さわると、みんな石を投げたり棒で叩たたいたりしてとうとう殺してしまつた。

それにしても蛇のお腹があまりにも太いので、割って見ると兎を丸飲みにしていた。

みんなは蛇の祟りたたを怖おそれて、そのあたりでいちばん見晴らしの良い所へ埋めて、ねんごろに供養し、そこへ松の小苗を二本植えた。その事はあまり世間の人に話しながらなかったという。

年を経てその松の木は里の方からでも見る事が出



塩ヶ森風景

来る程の大木となり、不思議なことにその一本は妙に曲がりくねって、大蛇の姿に似てきた。そして何時とはなしに幹の中途から裂けて、大きな虚うつろ（空洞）ができた。

薪たきぎを取りに行った子供等は、松の木の元で一休みして、その虚うつろの中で火を燃やしたりしてゐるさをした事もあったそうだ。その松の木も昭和四十五、六年頃惜しくも落雷のため枯れてもうあとかたもなくなった。世は移り変わり、今はそのあとに原子力発電の送電線の鉄塔が悠然とそびえている。

塩ヶ森の中腹、休み場の二本松に親しんだ人は多いが、大蛇の話はごく僅わずかかの人しか知らない語り伝えである。

のびやがり狸

南方竹之鼻なんしよに、禅宗派南昌寺がある。現在の福積和尚ふくずみおしょうの先々代宗園和尚そうえんのお説教は、テレビ、ラジ

オのない当時としては壇家の人々にとって、まさに教養娯楽版を一手に引き受けて下さったかたちで、その集まりは待ち遠しいものであった。

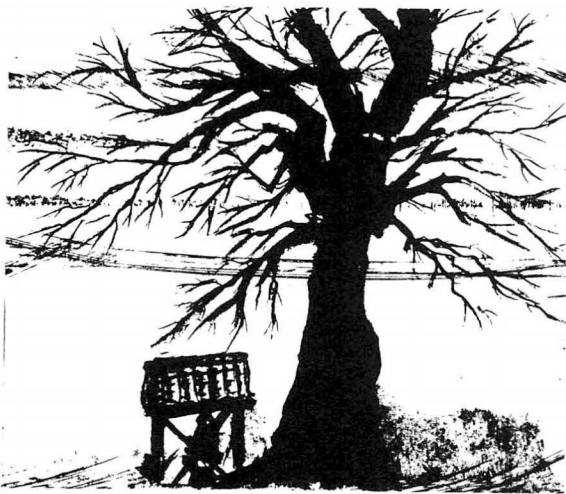
ある日、和尚さんが則之内の安国寺へお施餓鬼会に行つての帰り道での出来事である。宝泉川の下流の土手に大榎があつて、そこを通る時榎の枝が垂れかゝつて、和尚さんの頭を「チョロ、チョロ」と撫でた。しばらく行つても頭を撫でられるので不思議に思い、うしろを振り返つて見た。するとそこには可愛らしいお小僧さんが立っていた。訳を聞くと「和尚さんをお寺の門前までお送りするよう言いつかつたのです。」と神妙に頭を下げた。「それはご苦労じゃのう。」と言つてまた歩きかけた。

しばらく行くとまたまた頭を「チョロ、チョロ」と撫でられるので「さては噂ののびやがり狸が小僧に化けてついで来たな」とにらんだ。和尚さんに迷惑がひらめいた。それで今度頭を撫でられた時、すばやくうしろへ振り返りざま、「コラッ。」と一喝した。和尚さんのあまりの早技に、ショックを受けた狸は、和尚

さんの頭を撫でようとのび上がり飴の様に延び切った姿のまゝ元の様に縮まらなくなってしまった。

狸はぶざまな格好で、和尚さんに涙ながらに謝つた。「これからは決してわるさはいたしません」と固く約束をしたので、和尚さんは法の力で狸を元の姿に戻してやった。そして安国寺で貰つたご馳走を分け与える。と狸は喜んで大榎の方へ帰つたという。

以来、のびやがり狸は大変おとなしくなり、榎の元のお地藏さんと仲良く暮らしたということである。



のびやがり狸の住んだ大榎

名越座の素人芝居

娯楽の殿堂、名越座の誕生とその盛衰については、ふる里の記録第一集「麦うらし」の稿に載せられているが、ここではみる角度をかえ、また補足的に振りかえってみたい。

日露の戦勝で歓喜の嵐は日本全国津々浦々まで沸きあがり、主な街道筋の市や町には演劇場が新設され、歌や踊りに酔っていた。

明治四十年、時の實力者名越啓次郎は、宮東区で「かど店」と呼ぶ日用雑貨を商っていたが、その向かい側の自分の土地三百六十坪に三百坪の二階建（一部三階）入母屋造り、収容人員五百人の豪華な劇場を建て、自らの姓をとり「名越座」と命名した。

その形容は、松山の新築座をモデルにしたもので、当時の金で壱千貳百五拾円の資金を投じたという。

正面舞台に回り舞台と奈落（舞台の一部が落ち込み

下から出てくるしくみ）を造り、また花道には「スッポン井戸」を設けるなど、斬新な作りで劇を一層盛り上げていた。見物席は四人が座れる桝席で、正面二階には御簾の垂れた特別室を設けるなど、近郷きつての、絢爛たるものであった。

広い入口の両壁板に、当時賣出しの名優の似顔絵や名場面、浮世絵、あるいは芸能界番づけの額等が、所せましと掲げられていた。名越座の印半纏を着た、あげ鉢巻姿の若衆が、威勢のよい呼び声で下足を預かってくれた。

中に入れれば、茶店、中店があつて、お客の注文に十分間に合った。黒緇子の襟付に紫色の前だれをかけたお茶子が愛嬌よく接待してくれて悠長な芝居小屋のムードをかもし出していた。

中央から名優、師匠が続々と来演し、賑々しく開幕したことはいう迄もなく、舞台装置の常雇いも何人かいて要領よくたち働き観客を退屈させない。

この頃になると見物客の中には、ただ見るだけでは飽き足らず、自らもステージに立ち出演する者も出て

きた。

明治天皇の崩御と乃木將軍夫妻の殉死は、世人に冷水を浴びせた。しかし、乃木將軍の人徳と言うべきか、將軍の伝記ものが劇に浪曲に創られ世に受けた。

この頃、北方旦ノ上の田中彦一の扮する乃木將軍の風格、セリフがピツタリで真に迫り、女人の芸も及ばない、芸題は乃木大將の墓参り、妻返し、敵将ステッセルとの礼を尽くした講和談判は何度見ても、見飽さない。また、彦一は乃木將軍の役ばかりでなく、老婆の役も際だった適役で生まれつきの芝居巧者といへよう。

この頃の作であろうか、現在町役場に珍しい浪曲のカセットが残っている。題して「乃木將軍と一等卒」口演は天光軒満月、曲師田中百合子になっている。

その筋書きは、満洲の陣營で川上村出身の田村亀吉一等卒が、故郷で貧しい生活をしている酒好きの田村宗右衛門という父親のため、五錢十銭の日給から酒代を貯め、明日には戦死するかも知れない身で、最後の仕送りと知り、その考心に感銘した乃木大將は、自ら



喜樂会の社會劇

もこれに足し親許おやもとに送金するという將軍の部下思いの物語りで涙なみだなくしては聞けない美談である。

これは田中彦一の自作自演を浪曲化したものかと思われるが定かでない。川上村の出征軍人名簿の中にはこの人名は見当たらない。あるいは今は八幡濱市に合併している西宇和郡川上村出身かとも考えられるが、レコードも口上書き原文も愛媛県温泉郡川上村と明確に謳うたわれている。

さて時代は大正も終わりに近く、田中が先頭に立って若い後継者の育成に力を尽くした。上砂みやけに三宅三次、山崎昇だておとこがいて、三宅は滑稽茶利物を、山崎は伊達男いなせ役を得意とした。

下之町の「床定」と言っさんばつて、散髪を業としていた定さんの敵役は堂に入ったもので、観客を引きつけた。市場天神区に林正廣、渡部与太郎は共に二枚目で、それぞれの特技、特長を生かして好演した。

上之町出身で小柄な美男、満田岩夫は当時松山市でたたみ畳職をしていたが、出番があれば、わざわざ帰り、これ等の連中に参加し女役を買って出た。時代は昭和



滑川昌禅寺大施餓鬼芝居

に入り、素人芝居は量、質共に盛り上がり、北方西之側に土屋常一、茶堂の重松昇は共に老け役が良く似合ったし、老人の動作、セリフもよく研究していた。上之町の渡部小櫻は、芝居は三度の飯より好きと自称するだけあって娘役をよくこなし、遂に玄人の旅役者一座に加わり全国を回った。

この時代の者は既に故人となっているが、竹之鼻の高須賀新五郎は女形としてその美しい容姿と演技は観衆を魅了した。其の後、彼は扇崎流舞踊の専属化粧着付係りとして現在も活躍している。

これ等の人の出しものは新派では菊池寛原作の「父帰る」「恩讐の彼方に」その他「金色夜叉」「不如帰」の明治文芸物が多かったように思う。髻物では「国定忠治」の仁俠もの、「慶安太平記お堀端丸橋忠彌」等で数多く、勸善懲悪で観衆を唸らせていた。

こうした催しは、名越座ばかりでなく、交通不便で娯楽の少ない土谷、滑川の地域でも盛んに流行した。特に、滑川昌禪寺大施餓鬼の歌舞伎芝居は大がかりで、一か月も前から師匠を招き本格的に練習した。こ

れに應ずるように、見物客も遠方より親戚縁者友人を招き、酒肴で接待し、客の一人でも多いことを誇りとした。今もお薬師さんの境内に朽ちた演舞場が残っており老人の昔懐かしい思い出となっている。

かくて戦後も三十年になるとテレビの普及で、客足はガラリと落ちた。ある時には畑違いの政談演説会、小学生の学芸会などに利用していたが、桝席を外し、出入りのしやすい椅子席に改造し、専ら映画に切り替えたが、それも時代の波に抗しきれず、遂に四十年代に入り、さしもの華々しかった大衆殿堂も、創業以来七十年、遂に伝統の幕を閉じた。老人には寂しい限りである。



編集を終わって

川内老連が「老人の生甲斐と役割の一端として伝承事業を採り上げた趣旨方針を享けて」「ふる里の記録第三集 民話と伝説編」の特集を担当することになりました。これは大変な重責で果たしてお役に立つことが出来るか、どうか頗る不安で緊張を覚えました。

まづ始めに二十名ほどの編集協力委員さんのお手を煩らわし、町内各地に埋もれている昔話を詳しく拾い上げ、それを十名の編集委員が各地域別に分担し、各自それぞれの個性と工夫を凝らして、より広く、そして細かく深く掘り起こしつつ年代別に整理してみました。

その際、既に町誌等で広く周知されているものは一応除外することにしていきます。

史談、伝説の中で、平家の落人と言えはすぐに四国では阿波の祖谷、南予の平家谷を連想しますが、この地、明河の九騎・海上の両部落は石鎚山麓の秘境で、源平の悲話は寿永の昔から語り継がれていますが、その多くは断片的でしかなく、如何にも惜しく悔まれます。又交通、難所と言われる旧金毘羅街道、櫻三里の山峡周辺にも数々の珍しい民話が残っておりますし、広い平坦地にも永い歴史の中で、天災地変や厳しい藩の圧制と斗い、常に貧苦と病魔に耐え忍びながら生き抜いて来た庶民の生きざまが生々しく語り継がれています。

生活文化の低い時代で、淫祠邪教からくる迷いや、今でこそユーモアな狐狸の化け話まで幅広い話題が盛り澤山に浮彫されているのも懐古の情を一層駆り立ててくれます。

而しこれらの話を描写する技能が足りず、折角の資料が生かされていないばかりか、文体の不揃い、新旧漢字の混用で読みづらい所もあろうかと憂えています。

それにしても編集委員全員が事業の果たす使命感に溢れ、己れを忘れ、最後まで頑張って頂いたおかげで漸く

完成し、ここに安堵と満足の胸を撫で下ろしたというのが實感であります。

これが二十一世紀を担うて立つ青少年に何等かのお役に立てれば、それこそ望外の幸と思います。

この種の話題や補足説明は、もうこれでよいという限界はありません、更に人物傳、文化面に及べば尽きるところもありません。これらの積み残しは次集に託し続刊してほしいと念願し本編を終わらせて頂きたいと思いません。

なお、内容については、出来るだけ多くの人に接し遺跡、現場を確認し写真を添付するなど慎重を期したつもりですが、尚それでも調査の洩れ、或は聞き質しの時機方法の相違から、ご不審の点もあろうかと思えます。

編集方法についても併せてお気付きの場合は、後あとの為ご指摘頂ければ有難いと思えます。

最後になりましたが、本編発刊に当たり、何かとご指導賜りました、森正史先生、並びに橋本矩之先生を始めご協力をいただいた各位に厚くお礼申し上げごあいさつといたします。

昭和六十一年十一月

ふる里の記録、第三編、編集委員長 渡部 団 正

委員 外一同

「ふる里の記録」編集委員

委員長 渡部 団正

副 " 高須賀 英一

" 中川 喜十郎

委員 大石 茂三郎

高須賀 薫明

佐伯 太郎

玉井 信義

大西 政之進

田中 照子

高須賀 チヨノ

社協専門員 高須賀 秀清

昔話を集める会委員

滑川 玉井 信義

今井 文四郎

土谷 佐伯 太郎

河之内 中川 喜十郎

竹内 頼衛

吉田 秀雄

小倉 清郷

今井 ギン

近藤 安長

日野 知明



名越源

町西 渡部 団正

渡部 茂

北方東 菅野 藤吉

仙波 サカヨ

田中 照子

町西 渡部 団正

北方西 高須賀 薫明

江戸 七郎

桑原 時雄

高須賀 義雄

矢野 信次郎

町東 相原 太郎

南方東 高須賀 英一

高須賀 チヨノ

南方西 大西 政之進

和田 佐太郎

菅野 光直

井内 高須賀 秀吉

表紙絵

北方西 矢野 信次郎

表記

川内町北方 橋本 矩之

表題

河之内 (故)佐伯 惟揚

監修

重信町下林 森 正史

さし絵

南方東 高須賀 チヨノ

高須賀 キヨエ

ふる里の記録(第三集)

民話・伝説篇

編集者 川内町老人クラブ連合会

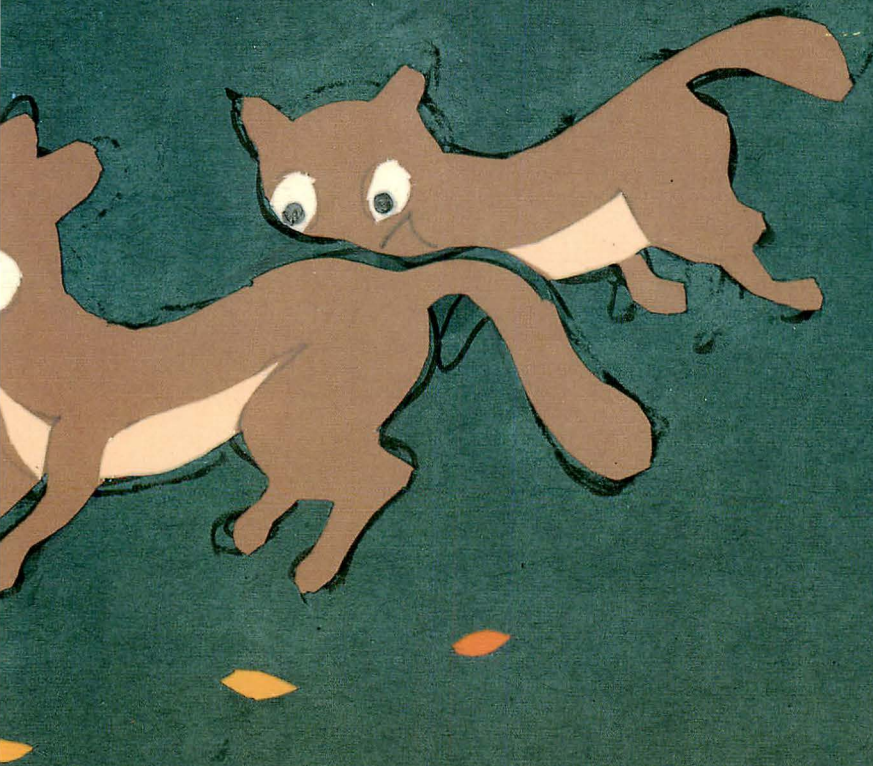
昔話を集める会

発行所 川内町老人クラブ連合会

発行日 昭和六十一年十一月

印刷所 松山市東石井町

アマノ印刷



信